
ダイの大冒険でよろず屋を営んでいます

トッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダイの大冒険でよろず屋を営んでいます

【Nコード】

N2165Z

【作者名】

トッシー

【あらすじ】

ひよんな事からダイの大冒険の世界にトリップしたオリ主。能力は採取と錬金釜による合成だけ。はたしてオリ主は最終装備、旅人の服な勇者パーティーの助けになれるだろうか？

本日の目玉商品『万能薬』（前書き）

ダイの大冒険ってラストでも武器以外はシヨボーですね。

なにせ装備を新調した途端、強敵との戦いで壊れたり敗れたり燃えたりして無くなっちゃいますから（笑）

しかしドラクエとしてそれはイカンとオリ主と共に一念発起！

ほのぼのとマツタリとよろず屋をやっ払いこうと思います。

本日の目玉商品『万能薬』

俺の名前はタケルです。

ひよんな事から異世界に来てしまったトリッパーです。

テンプレよろしくで特殊な能力、持っています。

最強じゃないけど…。

「いらつしゃい、ここはよろず屋だよ」

俺の前には様々な道具が並べられている。

当然これらは商品であり、俺の飯のタネだ。

勿論そんじょそこらの店とは格の違う商品を取り扱っている。

その自信と自負がある。

本日の商品は

特やくそう（HP90ほど回復） 100G

月のめぐみ（HP90ほど回復、麻痺を回復） 210G

万能薬（HP90ほど回復、毒、麻痺を回復） 360G

賢者の聖水（MP90ほど回復） 1240G

毒針（偶に一撃で敵を葬る） 980G

命の指輪（歩く度にHP回復） 2500G

祈りの指輪（使うとMP回復。但し壊れることもある） 2800G

それぞれ20個用意してある。

値段が高い？

いやいや適正価格ですよ。

けっしてボッタクリではないです。

第一、本来ならこの世界には絶対に存在しない一品ばかり。

このくらいの値段にしてもバチは当たりません。

「これは興味深いですね」

おっと、自分の世界にトリップしてる場合じゃない。

お客さんだ。お客さんは神様です！

俺は満面の笑顔を向けて言った。

「いらっしやいませー」

「こんにちは、

この店は素晴らしいですね。とても露店とは思えないですよ」

そこにいたのは男二人組の旅人だった。

成人した男性と、まだ幼さの残る顔立ちをした少年。

男性の方は、優しい顔立ちをしており、掛けたメガネが更にその表情を際立たせていた。紫色の髪を左右にカールさせていて貴族っぽい。

腰には剣を挿している。戦士だろうか？

少年の方は黒い髪にバンダナを巻いており、腰にはロッドを挿している。

魔法使いか僧侶のようだ。

（どこかで見た事ある二人組だな、どこだっけ？）

俺は二人を観察した。

お金を持っているようにはとてもじゃないが見えない。

この二人がどこの誰かは別にしてもコチトラ商売だ。

俺はジト目で二人組を見た。

男は興味深そうに並べている商品の一つ一つ手にとって眺めている。

「先生、いつまで見てんですか。もう行きましようよ」

「ちょっと待ってください、ポップ。もう少しだけですから」

ん？

センセイ？ポップ？

まただ。この二人、何か引つかる。

何だっけ？

「大体、何ですかこの値段！

薬草が100G！？ぼったくりもいいところっすよ！」

ムカ！

何だと！この野郎！

それは聞き捨てならねえな！

「おい、お客さん！ぼったくりとは聞き捨てならないな！

ソイツは唯の薬草なんかじゃないんだよ！

この俺が心血注いで調合した特やくそうだ！ケチつけんな！」

「な、なんだと！

こんな怪しい薬草がなんだってんだ！？

普通の薬草とどう違っってんだ！」

「聞いて驚け！」

その薬草は普通の薬草の約3倍の効果があるんだ！

ベホイミ以上なんだぞ！」

「だったら普通の薬草を3つ買ったほうがお得だろうか！」

「そりゃ安全が確保できればだろうが！」

非常時にチマチマと薬草で何度も

回復してる暇があると思ってるのか！？」

「何イ！？」

「この特やくそうはな、即効性なんだ！」

回復魔法並なんだよ！だからこそ100Gは高くない！

むしろ安いくらいだ！だから買え！」

「ふ、巫山戯んな！どさくさに紛れて何いってんだ！誰が」

「特やくそうと月のめぐみ、そして万能薬をそれぞれ2つお願いします」

「せ、先生っ！？」

ほう、この先生は物の価値が分かっているようだな。

俺は最高の営業スマイルを浮かべて声を上げた。

「毎度ありがとうございます。1340Gになります」

「これでいいですか」

「はい、1340Gちょうど頂きます！またのご利用をお待ちしております！」

俺は受け取ったお金をしまい込むと、お客様に向かって深々と頭を下げた。

「ところで」

お客さんはお買取った道具を袋に入れながら聞いてきた。

「あなたは一人で商売を？」

「ええ。まあ」

「まだ若いのに大したものですね」

何だこの人。

男性は屈託の無い笑顔を向けて感心する。

そこに悪意は全く無い事が感じられる。

その笑顔に俺は思わず目を逸らしてしまう。

「……えっと」

「ああ、すいませんね。先程、ご自分で薬草を調合したと言っていたので」

つい興味が出てしまったのですよ。

男性はそう言った。

俺を褒めているのが気に入らないのだろう。

少年の方は面白くなさそうにしている。

「先生、もう行こうぜ」

「はいはい、分かっていますよ。それじ私達はこれで」

「はい、またどうぞ」

心に引っかかりを残したまま、俺は二人を見送った。

ギルドメイン大陸。

この世界の中心に位置する最大の大陸だ。

1年前、俺はこの大陸最大の国、ベンガーナ王国の郊外にある小さな村で目を覚ました。

混乱して、嘆いて、絶望して、そんな俺を村の人々は優しく受け入れてくれた。

この世界の常識を学んでいく内に俺は自分の置かれた状況を受け入れ納得した。

納得できた一番の理由はやはり魔法と魔物の存在だった。

村の外で見かけたプルプルと震えるゼリー状の魔物を見た時、俺は

思いつきり肩を落として言った。

「ドラクエかよ」

そう、この世界はドラゴンクエストの世界だったのだ。ドラゴンクエストシリーズの中のどれかは分らない。もしかすると完全にオリジナルかもしれない。

しかしドラクエと分かった時、俺の中にあつた絶望は完全に消えた。絶望は希望へと変わったのだ。

だってドラクエだよ？

しかも村の人の話では魔王は既に勇者によって倒されて平和な世界。村の外でスライムに襲われなかった理由も頷ける。

命の危険もなく、この世界を堪能できるということだ。もしかすると魔法を覚えることが出来るかもしれない。となると俺のステータスってどれくらいだろう？

その時だった。

俺の脳裏に自分の『つよさ』が浮かんだのだ。

「うわっ、極端なステータス。しかもオレって弱っ！」

浮かんだステータスは次の通りだった。

タケル

レベル：1

最大HP：20

最大MP：500

ちから：10

すばやさ：10

たいりよく：10

かしこさ：256

うんのよさ：256

EXP：0

攻撃力：10

防御力：7

どうぐ

E：普段着

呪文・特技

錬金釜

採取

大声

口笛

寝る

俺は自分の能力値よりも特技に注目した。

錬金釜？採取？

何それ、どうやって使うんだ？

気がつくとかーソルを合わせて採取を選んでいた。

採取を行いますか？

？はい

いいえ

選択すると、目の前に光るものが。

光っているものに手を伸ばすと。

太陽石を2個手に入れた

気がつく俺の掌の中にはぼんやりと光を放つ石が二つ、しっかりと握られていた。

実際にこの商売を初めて1年になる。

この世界で得た俺の能力。

採取と錬金釜。

採取は割と何処でも利用できる。

その辺で適当に使えばレミラーマよろしく辺りが光るのだ。
光に触れると、素材が手に入る。

俺は自分の能力は最大限に利用した。

そうでなければ生きていくことなんて出来なかったからだ。
はつきり言つて俺に戦闘力はない。

だがそれでも俺の能力はチートといっても良い。
何で自分にこんな能力があるのか分からないが、考えたところで答えなど出る筈がない。

ご都合主義ということ、とつくの昔に諦めた。

この世界に来て1年。

魔物が普通に存在する異世界で、俺はほのぼのと、旅のよろず屋を営んでいる。

勿論平和な今の時代でなければ旅など出来ない。

俺の特殊なよろず屋は様々な場所を旅しないと成り立たないのだ。
なにせ錬金には素材が必要。

そして優れた素材を得るには採取が必要不可欠だからだ。
普通の店で売っているものでは優れた物は作れない。
だからどうしても旅を続ける必要がある。

「ああ、平和って最高っ！」

俺は岩場で採取を行いながら悦に浸っていた。

岩場で適当に採取しているだけで、質の良い鉄鉱石やミスリルが手に入るのだ。

これだからこの商売は止められない。

「…やっぱりやめようかな〜この商売」

「ぐるるるるる」

採取もキリの良いところで切り上げ、街に戻ろうとした矢先だった。
リカントが俺の前に立ちふさがった。

ヨダレをだらだらと垂らしながら、血走った視線を俺に向けてくる。
あれ？平和なドラクエ世界は？

本日の目玉商品『万能薬』（後書き）

オリ主はよろず屋としてダイの大冒険の世界では絶対に手に入らない回復アイテムや武具を売りさばいていこうと思います。

多分、お金足りなくて買えないことは無いと思います。
レオナ姫がいるから…。

本日の目玉商品『光のドレス』（前書き）

行商を続けるオリ主。

一体何時になったらダイの大冒険の世界と気づくことやら……。

本日の目玉商品『光のドレス』

「ガアアアアアアア！！！」

「うわっ、こっち来んな！」

リカントの叫び声と同時に俺は背を向けてダッシュ。
当然逃げる。

なにせ俺には戦闘力はない。

レベル1でどうやってリカントに勝てと？

装備が充実していても現実に戦うんじゃ話が違う。

戦って勝てる相手じゃない。

俺は全速力でひたすら走る。

しかしここは岩場。

まともに走れる筈もなく、躓き転ぶ。それでも俺は立ち上がって逃げる。

だが

「い、いつの間に！？」

目の前の岩陰からリカントが飛び出した。

どうやら回りこまれてしまったようだ。

俺は急ブレーキを掛けて立ち止まる。

不味い。本当に不味い。

実戦経験無しの俺にはマジでキツイ。

それでも生き残るために、俺は手持ちの道具を確認する。

「……………これだ」

錬金したばかりの取って置きの武器。

武器を操る事は出来ないが、武具に宿った力を使っくくらいなら。

「俺にも出来る！」

俺は道具袋から一振りの長剣を取り出して叫んだ。

「氷結ッ！！」

俺の声に反応して吹雪の剣の刀身が輝く。

ビュオオオオオッ！！！！

解き放たれた力はうねりを上げて吹雪へと変わりリカントを包み込んだ。

無数の氷の刃が嵐となってリカントへと殺到する。

「ギャアアアアアア！！！！」

マヒヤドと同格、絶対零度の銀世界が一瞬にして目の前に広がった。俺を襲ったリカントは……。

「ご愁傷様です」

リカントは氷の檻の中で息絶えていた。完全にオーバーキルですね。

「あーあ、これじゃあ暫く採取は無理か」

氷に閉ざされた岩場を見渡して俺は溜息を付いた。

「そつえばどうしてリカントが襲ってきたんだろう？」

確か勇者が魔王を倒して魔物は邪悪な意志から解放されてる筈

それなのに……っ!？」

ギアア!ギアア!ギアア!

ま、魔物の声!？」

遙か遠い山向こうから魔物と思わしき声が聞こえてくる。

俺は思わず身を竦ませた。

じよ、冗談じゃないぞ!

もしかた魔物に襲われでもしたら!？」

高価な装備があるからって安心など出来るわけがない!

第一、もし不意打ちでも受ければ間違いなく死ぬる。

街までかなりの距離がある。

もし道中襲われたら!？」

「……ん?そうだ、何ですぐに気が付かないだ俺のアホ!」

さつきはリカントの所為で気が動転してたんだな。

命が掛かっていたのに。

俺は道具袋からキメラの翼を取り出すと空に向かって放り投げた。

パララタッタター

空高く舞い上がりながら、俺は確かにファンファーレの様な音楽を聞いていた。

もしかしてレベルアップ?

現在オレはベンガーナに来ていた。
リカントを倒した俺は旅支度を整えると、直ぐにベンガーナに旅立った。

行商人の利用する比較的な安全な街道。

俺は聖水を惜しむこと無く利用、そしてレベルアップすることで新たに習得した特技『忍び足』を使いながら旅をする事で魔物を避けながらベンガーナに到着することが出来た。

もちろん道中、採取を行うことを忘れなかった。

どうやら商人魂が染み付いてしまったようだ。

ベンガーナに辿り着いた俺は、さっそく商売を始める為に適当な場所を探す。

行商人である俺にとって露店を開く場所の確保は最優先事項だ。

「…………お？」

露店を開く場所を探して歩くこと約1時間。

比較的に人通りの多い広場に辿り着いた。

俺と同じように露店を開いている行商人が何人かいるので偵察として取り扱っている商品を覗いてみる。

よし勝った。まあ当然だな

俺はほくそ笑むと、広場の一角を陣取り露店を開いた。

今日お俺は武具屋さん！

そして本日の商品はコレだ！

玉鋼の剣：4200G

隼の剣：5000G

玉鋼の盾：1400G

魔法の盾：2000G

精霊の盾：3000G
鉄仮面：2100G
玉鋼の兜：4000G
玉鋼の鎧：4800G
魔法の鎧：5800G
精霊の鎧：7000G

さつき鍊金したばかりの出来立てホヤホヤだ。

並べてある殆どの商品がどの店にも取り扱っていない物ばかり！

次から次へと並べられていく見た事もない武具。

通行人達は次々と足を止めて興味深そうに見ている。

何せ商品と袋の大きさが一致しないのだ。

見た目どこにでもある布袋から次々と剣や鎧が飛び出していくのだ。

そりゃ驚くわな。

このチートな道具袋は気がつけば持っていた俺の財産だ。

こいつのお陰で俺は幾らでも持ち運びが出来る。

商人にとって、コレほど素晴らしい物は無いだろう。

「へえ、こりゃ凄い！見たこともないものばかりだ！」

おっと、お客さんがお呼びだ。

俺は満面の営業スマイルで声を上げた。

「いらっしやいませー！！」

通行人を掻き分けて俺の前に陣取った客は4人。

如何にもな格好の冒険者達だ。

ドラクエ？の典型的なパーティーだった。

見た目が男勇者に始まり戦士に魔法使い、そして僧侶。
しかし何処か頼りない。

ていうか俗物丸出しだ。表情が…。

「おい見ろよ、まぞっほ！この盾すげえ！」

「ふむ、魔法の盾か。この軽さならワシにも使えそうじゃな」

「でも仰々しい装備しか置いてないのね。ローブやドレスは無いの？」

「そう言つなよ、ずるばん。確かに品揃えは悪いが置いてある装備は一級品だ」

「でろりん…」

何こいつら…。

それに品揃えが悪い！？
言ってくれるじゃないか！

露店のスペースじゃ並べられる商品の数にも限りがある。
ドレスやローブだと？

そこまで言つなら出してやろうじゃないか！

「お客さん、ローブやドレスをご所望ですか？」

「ええ、置いてないの？」

「勿論有りますよ！取って置きの一品がね」

「なんですって！ならそれを出してみなさいよ！」

「しかし、かなりの一品ですのでお値段張りますよ。

お客さん大丈夫ですかー？」

「勿論よ！お金ならいくらでも出すわよ！」

「お、おい！ずるばん！」

仲間たちが慌てだす。

どうやら浪費癖のある僧侶さんの様だ！

いいカモだ。せいぜい吹っ掛けてやるとするか。

俺は金色に輝くドレスを取り出した。

お客さんの眼の色が変わる。

「こちらは光のドレスです」

どうですか？

俺は今ドヤ顔に違いない。

ドレスのあまりの輝きに目を奪われている客。

メチャクチャ気分良いーーーーっ！！

「素敵……」

僧侶のお姉さんはウツトリとした表情で光のドレスを眺めている。
もう夢中だ。後一押しで堕ちるな。

「どうですか？お客さんにピッタリですよ？」

残念ですが今お客さんが見につけている服、

それでは貴方の美貌が損なわれるというものです」

「そ、そうかしら？」

僧侶の人は照れたように頬を掻く。

ここで一気に畳み掛ける！

「素晴らしいドレスは素晴らしい貴方にこそ相応しい！

どうですか？本来なら2万5千ゴールドですが、

今なら何と、たったの2万ゴールド！」

「ええっ！？5千ゴールドも安くなるの！？」

「はい、是非お客さんに着ていただきたく…」

「買う！買うわ！」

「ず、ずるばん！」

「やめんか！」

「ああん！？」

「何でもないです、はい」

止めようとする仲間を一睨みで黙らせた僧侶さん。

彼女は即金で俺に2万ゴールドを支払った。

おお、リッチだ。冒険者って儲かるんだな。

「まいどありがとうございました」

俺は勇者一行を笑顔で見送った。

それにしても、冒険者って凄いな。

ゲームみたいに魔物を倒してもGは手に入らない。

残るのはやはり魔物の死体だけだ。

この世界の冒険者は依頼を受けて商人を護衛したり、捜し物をしたりと何でも屋の様な事をして報酬を得ている。

魔物を倒してGを落とすなら皆やってるだろう。

「あの、コレを下さい」

おっと、自分の世界に浸っている場合じゃない。

「いらっしやいませ！」

光のドレスを皮切りに、商品は次々と売れていく。

他では手に入らない珍しい品の数々。

俺は他の商人の嫉妬を受けながら、笑顔で商売を続けるのだった。

本日のタケルのステータス

タケル

性別：おとこ

職業：錬金術師

レベル：3

さいだいHP：28

さいだいMP：508

ちから：14

すばやさ：12

たいりよく：15

かしこさ：256

うんのよさ：256

攻撃力：54

防御力：63

どうぐ

E：雷帝の杖

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパリング

呪文・特技

錬金釜

採取

大声

口笛

寝る

忍び足

本日の目玉商品『光のドレス』（後書き）

リカントを倒してレベルアップしたオリ主です。
魔法は契約しないと覚えないのでまだ先です。

本日の目玉商品『吹雪の剣』（前書き）

装備はドラクエシリーズの良いところ取りです。
ご了承ください。

本日の目玉商品『吹雪の剣』

「是非その剣を売って欲しい！この通りだ！」

現在、俺の目の前で美男子が頭を下げて懇願している。

ここはリンガイア王国。

世界でも1、2位を争う程の軍事国家で城塞王国として有名だ。

突然凶暴になり始めた魔物たち、巷では魔王が復活したのではないかという噂が実しやかに囁かれていた。

俺はこの国ならば、そう易々と魔物達の侵攻に遅れは取らないだろうとリンガイアにやってきた。

道中、何度か魔物に襲われもしたが、チート装備の特殊な力でどうにか撃退。

リンガイアへ辿り着いた俺は、いつも通りに露天を開いた。

本日の商品はコレだ！

特やくそう（HP90回復）100G

超万能薬（HP90→120回復・眠り、麻痺、毒、猛毒、混乱回復）300G

世界樹の雫（パーティーのHPを完全回復）3000G

世界樹の葉（死者蘇生）10000G

エルフの飲み薬（MP完全回復）3000G

爆弾石（イオラの効果）170G

砂塵の槍（マヌーサの効果）6600G

ムーンアックス（攻撃した相手を混乱させる）8800G

ウイングエッジ：9000G

普通のチーズ：10G

辛口チーズ：15G

おいしいミルク：5G

高価な物ばかり取り揃えると全く売れない日もあるので普通の客にも手が届く値段の商品も並べておく。ドラクエ？のチーズだ。戦いの役には立たないが需要はある。

俺は吹雪の剣を自分の側に置く。最近かなり物騒だからだ。強引に商品を持って行こうとしたりする者。

そして難癖つけて営業妨害をする奴が出てきたのだ。今回も…。

「テメエ！舐めてんのか！」

「そうだ！足下見やがて！こんな値段ありえねえ！」

「いいえ、適正価格です」

俺は文句を付けてきた二人組の男にピシヤリと言いつつ男たちは顔を真っ赤にして睨みつけている。

「買う気がないのなら、ご遠慮ください。」

他のお客様のご迷惑になりますから」

「な、何だと！？」

「俺達は客だぞっ！？」

「お客様、値切りの交渉ならば当然の事、

しかし度が過ぎれば唯の営業妨害です。お引取りを」

「こ、この糞ガキがあつ！」

男達は腰に差していた短刀を抜き放った。
周りから悲鳴が上がった。

ヤレヤレ、最近はどういった客が多くて困る。

俺は側に置いてある吹雪の剣に手を掛け、そして

「やめないかお前た「氷結っ！！」…うわあああああ！？」

吹雪の剣に込められた力を放つと同時。
誰かが割り込んできたような気がした。

「「「うわあああああああっ！！！！」」「」」

「……あ」

割り込んできた誰かは男二人組と共に吹雪と突風に巻き込まれ吹き
飛ばされる。

リカントを一瞬で凍りづけにする吹雪の剣。

本来ならマヒヤド級の威力を出せるが、手加減して放つ事が可能だ。
そうでなければ辺り一帯が銀世界になっている。

そんな事よりも…。

「大丈夫かな？」

「……うくくっ…だ、大丈夫だ」

巻き込まれたのは青年のようだ。

蒼銀の髪の凛々しい顔立ちの美青年。

青年は服についた氷や霜を払いながら立ち上がった。

「す、すいません。大丈夫でしたか!？」

「ああ、平気だ。それよりも君は凄いな。」

商人でありながら、あれほど高度な呪文を使うとは」

「いや、さっきのは呪文じゃなくですね」

俺は吹雪の剣を見せて言った。

「この剣の力なんですよ」

俺が吹雪の剣を見せると青年は目を見開いて驚いた。

「な、それじゃあその剣は伝説の武具なのか!？」

伝説の武具？

何言ってんだこの人。

別に勇者以外でも装備出来るぞ。俺も出来るし。

「いえ、伝説の武具じゃなくて俺が作った」

「なんだって!？これほどの剣を君が!？」

青年は吹雪の剣を手にとって刀身を覗き込む。
まるで剣に魅入られたように夢中になっている。

「……吹雪の剣といいます」

「吹雪の剣……、北の勇者たるボクに相応しい……っ！」

北の勇者？

どっかで聞いたような。どこだっけ？

それにしても勇者を名乗るとは……。

前のお客さんは格好が？の勇者だったし。

流行ってんのかな？

「頼む！」

青年がいきなり大声を上げた。

「どうかこの剣を売ってくれ！」

ナルホド、吹雪の剣が欲しくなったわけですか。

確かに欲しくなるのも頷ける。

何せ俺でさえ愛用している一品だからね。

しかもドラクエ？の吹雪の剣。

なんと攻撃力105！

戦闘中使用するとマヒヤドの効果！

最後まで愛用できる最高クラスの攻撃力の剣ですよ。

どうしようかな？

それ、売り物じゃないんだよね。

何せ俺の護身用として錬金した剣だし……。

「お客様、それは売り物ではございません。

コチラの剣は如何でしょう？お客様にピッタリですよ？」

俺は玉鋼の剣を取り出すと、青年に差し出した。

「違う！」

青年は腕を振って叫んだ。

「ボクは、ボクに必要な剣は、その吹雪の剣だけだ！」

どうかこの通りだ！その剣をボクに売って欲しい！」

終いには青年は頭を下げて頼み始めた。

それを見た他の客や通行人がヒソヒソとし始める。

「ノヴァ様があんなにしてまで頼んでるのに」

「ひどい！ノヴァ様が可哀想！」

「大体、あんな冴えない奴があればどの剣なんて似合わねーだろ？」

「宝の持ち腐れだな」

どうやら青年はこの国では有名人であり人気者のようだ。

それ以上に俺のライフは今にもゼロになりそうだよ！

こんちくしょう！わかったよ！売ればいいんだろ！

ククク……、売ってやるよ！買えるものならな！

「わ、分かりました。お客様の熱意に負けました」

「ほ、本当か！？あ、ありがとう！」

俺の言葉に青年の表情はパアッと明るくなった。

俺の手をとってブンブンと上下に振って礼を言っている。
どんだけ気に入ったんだよ吹雪の剣。

「吹雪の剣、60000Gになりまゝす！」

ピシリッ！

周りが凍りついた。

吹雪の剣を実際に使ったみたいに。

そしてまた周りがヒソヒソと話し始める。

「聞きました？60000Gですって！」

「さっきの二人組の言う通りだね。完全に足下見てますよ」

「ノヴァ様は勇者だぞ！もっとまける！」

「そうだ！そうだ！」

「やめないか！みんな！」

ノヴァは周囲を一喝してコチラへと向き直り頭を下げた。

「すまない、街の皆が失礼をした。」

代金は城のものに届けさせる。剣は使いの者に渡してほしい」

「は、はい。毎度ありがとうございます……」

か、買うのか？マジで？

60000Gだぞ！？どんだけ金持ちなんだよ！？

ゴールドは魔物から生まれる世界じゃないんだぞ！？
超大金なんだぞ！？

「ノ、ノヴァさま、よろしいのですか？ 将軍が何と言つか…」

兵士が二人、ノヴァに詰め寄っている。
今まで気が付かなかった。護衛の人かな？

「し、心配ないさ。これも正義のため。」

パパも…いや、父上も分かってくれるさ」

将軍だつて？

良い所の坊ちゃんどころじゃない！
本物のセレブかい！？

「この吹雪の剣は『氷結』の号令でその力を発揮します。」

使用の際はくれぐれもご注意下さい」

「わかった。『氷結』だな。覚えておこう」

ノヴァ様が去つて約1時間後、城の使いが来た。

そして確かに60000Gを支払い、吹雪の剣を購入していった。
将軍家パネエ…。

「店じまいするか…」

護身用に片手間で作った吹雪の剣。
まさか60000Gに変わるとは…。

60000Gは冗談だったんだけどなあ。

ヤバイ！ニヤニヤが止まらない。

こうなったら吹雪の剣、また鍊金しても良いかもしれない。
材料に余裕はあるしな。

いや、そんな事よりも重要な事実に今気づいた。
もっと早くに気づけよ俺のアホ！

「ダイの大冒険か…」

主要人物に有ってんじゃん。

アバンとポップ組じゃなくて北の勇者で気づくとは…。

まあ、イイ買い物していったからな。

やっぱりお客様は神様だな。

という事はどれだけレベルが上がっても魔法は覚えないだろうな。

確かこの世界は特殊な呪文を除き、契約しないと魔法は習得出来ない筈。

俺のMPって有り余ってたんだよな

自衛のためにも是非とも呪文書がほしい！探してみるか！

さて、今後の方針も決まったことだし今夜はパーティーと楽しむかな。
パ、パフパフとか…。

本日のタケルのステータス

タケル

性別：おとこ

職業：錬金術師

レベル：6

さいだいHP：37

さいだいMP：515

ちから：20

すばやさ：16

たいりよく：20

かしこさ：256

うんのよさ：256

攻撃力：60

防御力：65

どうぐ

E：雷帝の杖

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパリング

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り

本日の目玉商品『吹雪の剣』（後書き）

確か身の守りって無いですよね。

身の守り＝素早さ÷2でしたっけ？

本日の目玉商品『ロトの剣』（前書き）

ロン・ベルクさん登場です。

王者の剣を見たロン・ベルクさん、どんな反応するんだろう？
妄想しながら執筆しました。

本日の目玉商品『ロトの剣』

錆びついた剣に磨き砂、オリハルコンを加えるとアラ不思議！

「王者の剣の出来上がり」

この世界はオリハルコンの鉱脈がある。

といっても俺の採取スキルで偶然見つけた物だ。

実際に俺以外の人間にオリハルコンを採取することは出来無い。

一応チートスキルだし。

しかし実際にオリハルコンを手に入れた時、俺は狂喜乱舞したね。

錆びついた剣なんて、その辺の剣を塩水に付けて錆びさせただけだ

し、磨き砂なんて砂場で採取すれば普通に手に入る。

まさか本当に王者の剣が出来るとは思わなかった。

最強装備じゃねーか！？

「むむむ…、マジでどうしよう？

この王者の剣、攻撃力は？で使えば？と同じバギクロス」

ダイの大冒険の世界だとクロコダインの斧でも充分無双。

ちよつとしたアバンストラッシュ気分らしい。

それを振り回すだけで極大呪文連発出来る王者の剣…。

俺、魔王軍に目を付けられたりしないよな？

俺は王者の剣をスキルで見た。

王者の剣、攻撃力158。

戦闘中使用すると、バギクロスの効果を発揮する。

コレを装備できるのは勇者、戦士、賢者だろう。ついでに俺。

「どうするかな？」

俺はいつもの様に露店の準備をしながら溜息を付いた。

ここは森に囲まれたノド力な村、ランカークス。

未来の大魔導師ポップの生まれ故郷だ。

この世界がダイの大冒険だと気づいた俺は、店を畳むとリングアイアを出た。

何故ならあの国は近い内に超竜軍団に滅ぼされてしまうからだ。

俺はリングアイアを出る前に呪文書を購入した

初級の呪文しかなかったが今はこれで十分だろう。

契約できたのはヒヤド系呪文とバギ系呪文、そしてホイミ系呪文だ。これらの呪文を熟練することで更に上の中級、上級呪文を習得できる。

つまり要練習だ。

この世界は魔法力をコントロールする術があるので実際に呪文を使うとなると結構難しい。俺は中二病よろしくの妄想力のお陰で呪文自体は直ぐに使えた。

だがポップやマトリフのように魔法力を放出する芸当はまだ出来なかった。

ルーラやトベルーラ使いたかったなあ。

ていうか是非使いたい！主に逃げるために！

「……………おい、……………おい！」

ん？誰かが呼んでいるような？

「おい！聞いているのか！」

「は、はい！」

気がつく俺の目の前には強面の顔色の悪い男がいた。
いや顔色が悪いなんてもんじゃない！紫色じゃねーか！

男は自分の容姿を覆い隠すようにローブに身を包んでいた。
男の視線は王者の剣に釘付け。

身を乗り出して剣に手を掛けようとする。

その拍子にスルリと頭部を覆っていた布が落ちた。

耳長っ！なにコイツ？

「ダークエルフ？」

「誰がエルフだ、俺は魔族だ」

魔族だと？

そういえばここはランカークス。

ランカークスの魔族といえはもしかして…。

俺はまじまじと魔族を自称する男の顔を見た。

顔の中心に？傷、間違いない。伝説の魔剣鍛冶師だ。

「えっと、お客様？」

「そうだ」

「いらっしやいませ〜」

俺は最高の営業スマイルで魔剣鍛冶師を迎え入れた。

俺の対応に魔剣鍛冶師さんは一瞬、目を見開くように驚く。

「どうしました？」

「いや、魔族と名乗って歓迎されるとは思わなかった」

「お客様は神様です」

本日の商品はコレだ！

光の剣（使うとギラの効果） 4800G

ドラゴンスレイヤー（ドラゴンの鱗を易々と切り裂く） 12000G

雷の槍（デイン系の追加効果） 19800G

デーモンスピア（即死効果） 34500G

力の盾（使うとベホイミの効果） 17000G

水鏡の盾（使うとマホトーンの効果） 30500G

おかしな薬（使うと敵を混乱させる） 200G

万能薬（HP90→120回復） 360G

鉄鉱石（素材） 100G

ミスリル鉱石（素材） 1050G

磨き砂（素材） 20G

「お客様、何になさいますか？

他では手に入らない珍しい物ばかりですよ」

「そ、そうか……それよりも」

魔剣鍛冶師殿は王者の剣を指さした。

「こ、この剣を見せてもらっても良いか？

今まで人間の武器など興味は無かった……だがっ！」

魔剣鍛冶師様はにじり寄って鞘に収められた王者の剣を覗き込んだ。

「えっと、ご覧になれますか？」

俺が王者の剣を差し出すと、魔剣鍛冶師様はそれを引ったくった。鞘から剣を抜き放ち……、その表情を驚愕に染めた。

「……っ！？こ、この剣は……まさか！？」

魔剣鍛冶師様から滝のように汗が流れ落ちる。凄いな。どんだけ驚いてんだこの人。

「小僧っ！この剣、一体どうやって手に入れた！？」

「えっと、俺が造りました」

「な、何だとっ！？そ、そんな馬鹿な！？」

魔剣鍛冶師さんはフラフラとその場に崩れ落ちた。おーい、大丈夫ですか？

「こ、この剣をお前のような奴が？」

失礼な人だな。

「はい、じぶん錬金術師なもので」

「錬金術師だと？」

「はい」

魔剣鍛冶師さんは俺の顔をまじまじと見た。
なんか照れるな。

「小僧、名はなんという？」

「えっとタケルです」

「俺はロン・ベルクという。」

タケルよ、その剣だが俺に譲ってくれないか？」

えっと売ってくれじゃなくて譲ってくれ？」

そんな事言う人は初めて見た。

なんか図々しいなこの人。だから俺は笑顔で言っちゃった。

「王者の剣、120000Gになります」

「頼む！この通りだ！

俺にはどうしてもその剣が必要なんだ！」

知らんがな。客じゃないなら帰ってほしい。

ロン・ベルクは魔界でも伝説になるほどの鍛冶師だ。

そんな男が人間に熱心に接触を図る。

はつきり言って危なすぎる。魔王に目を付けられるじゃないか。

「お客様、他のお客様に迷惑ですねで…」

「…そうだ！俺の造った武具と交換はどうだ？」

120000Gなんて大金は無いが、それに見合うという自負はある

一品で足りないなら全て持って行っても構わん！だから頼む！」

ナンドト？

ロン・ベルクの作品と交換？

しかも全部でも良いかと？マジでか！？

「で、では実際にその商品を見せていただかないことには」

俺は努めて平静を装いながら言った。

「交換してくれるのか！？」

ロン・ベルクさん。物凄い嬉しそうだ。

当然か。王者の剣はオリハルコンの剣だ。

しかも武器としては最高クラスの攻撃力。

ロン・ベルクが眼の色変えるのも不思議じゃない。

俺は露店を畳むと、ロン・ベルクに連れられて森の奥の小屋にやって来た。

「ここだ」

「でも田舎とはいえ魔族のロンさんが

良く平気な顔で人里に来ましたね？」

「ああ、村にはダチがいてな…いやソレよりも入ってくれ」

ロンさんに促されるままに俺は小屋に入った。
中を見て溜息が漏れる。

「……うわぁ」

「どうだ？ここが俺の鍛冶場だ」

ロンさんは得意そうな顔で言った。

辺りを見渡すと、様々な武具が置いてあった。

どれもが不思議な輝きを放っている。魔力なのだろう。

しかし王者の剣と交換しても良いという程の品ではない。

ロン・ベルクの武具で欲しいものといえば決まっている。

鎧のシリーズだ。

あれを数品と交換なら考えても良いと思ったのだ。

「ロンさん、交換の品はここにあるもので全部？」

「だったら先刻の話は無かったことにしてほしいです」

「ま、待て！奥に俺の傑作がある！ちょっと待っていてくれ！」

待つこと数分。

ロンさんは布に包まれた武具を持って現れた。

見たところ四品。両手で抱えるには限界だろう。

ロンさんは一品を残して地面に置くと、布を外し始めた。

顕になっていく武具。

鈍い銀色が顔を覗かせる。

出てきたのは長弓だった。

不思議な事に弦が見当たらない。

弓は装甲の様な物が覆っており、それが弦を隠しているようだ。

「まず一品目、こいつは弓の魔装」

「弓の魔装？どういったものなんですか？」

「タケル、手にとって鎧化^{アムド}と唱えてみる」

「はい……アムド！」

弓を覆っていた銀の装甲が剥がれ意思を持つように俺の身体に装着されていく。

上から鉢金、胸当て、そしてプロテクターに脛当て。

まるで聖闘士のクロスだな。意外に軽い。

「気に入ったようだな」

「でもロンさん、俺に弓の心得はないですよ」

「お前は商人なのだろう？」

ロンさんはニヤリと笑った。

確かに俺が使える必要はない。でもなんか悔しい。

「次はこいつだ」

ロンさんは次の装備の布を外した。

出てきたのは銃剣だった。マジでか！？

「こいつは試作品でな。」

全く新しい概念の武具を創りだそうとしてこうなった」

「鉄砲と剣を合体させたんですか？」

「ああ。名はまだ無い」

「まさにガンブレードですね」

「ん？ガンブレードか……いいなその名」

どうやらガンブレードに決定したようだ。

「でも魔族であるロンさんが鉄砲作るなんて……」

「ああ、人間のように火薬で弾を撃ち出すものじゃない。」

そいつは魔法を利用した銃だ」

アバン先生の魔弾銃じゃん。

「何を想像しているか知らんが、

ソイツを使うと人間でも魔法剣を使うことが出来るようになる」

なんですと！？

「撃ち出した攻撃呪文を刀身に付与させて擬似的に魔法剣にする」

それがこのガンブレードの特性だ。どうだ気に入ったか？」

間違いなく竜の騎士を意識して造ってるよこの人。
どんだけ対抗心燃やしてるんだよ！

「素材はミスリル鉱石で出来ている。

強度は魔装に劣るが、同じ素材だと魔法剣に出来ないからな」

「どうしてですか？」

「魔装に使われているのはメタル鉱石。

こいつは呪文を受け付けられない物質だ。

だからガンブレードには使えなかった

最後に魔法の弾だ。装弾数は10発。

コイツは魔法の筒の応用で造り出した物で

攻撃魔法を詰めることが出来る」

成る程。

でもダイはヒュンケルの魔剣で魔法剣使ってたよな？

あれは竜の騎士だから出来る芸当って訳か。

考えている間にロンさんは次の武器の布を解く。

「これは……爪？」

鋭利な鉤爪が付いた手甲だった。
見たところ魔装ではないようだ。

「それは風魔の鉤爪」

「風魔の鉤爪……」

「とりあえず装備してみろ」

俺は言われるままにソレを装着してみる。
左右両方とも装着する。

「そいつは切れ味もさることながら特殊な力もある。

良いか？外に向けてだぞ？何かを斬るように振ってみろ」

「……シッ！」

爪から真空の刃が放たれて森の木を薙ぎ倒した。

「こ、これは……」

「物騒だからあまり振り回さないほうが良いぞ」

確かにその通りだ。

他の伝説の武具と違って号令が必要ない。
雷鳴の剣の様な攻撃魔法の追加攻撃。
それでもかなり強力だ。

「それで最後の武具は？」

俺は風魔の爪を外すとロンさんを促した。
ロンさんは頷くと、最後の武具の布を外した。

「柄だけの剣……？」

「魔闘剣だ」

首を傾げる俺にロンさんは説明を始めた。

「ソイツは持ち主の魔法力、もしくは闘気を刃に変える剣だ

昔、最高の杖を造る際、試作的に造り出した物だが…。

鍛冶師として外に出したくなかったが……」

これも王者の剣を手に入れる為だ。

ロンさんは不機嫌そうに呟いた。

そうか光魔の杖の……、ロンさん嫌ってたっけ。

「魔闘剣か……俺の場合は魔法力だな」

魔闘剣は俺の魔法力に反応し光の刃を創り出した。

俺の身長以上の刀身の長さにロンさんは目を剥いた。

「大した魔力の持ち主のようだな」

「……ロンさん」

「何だ？」

「王者の剣、ロンさんに譲るよ」

「ほ、本当か!？」

「はい、ロンさんの造った武具、大変気に入りました」

「商談成立だな」

俺達は互いに握手をすると視線を合わせて口元を釣り上げた。王者の剣はまた鍊金すれば良いだけのことだ。

しかし魔界最高の鍛冶師の作品は絶対に手に入らない。ランカークスに来て本当に良かった！

「気が向いたら何時でも来い。お前ならば歓迎しよう」

「はい、今日はありがとうございました」

「……タケル、お前の王者の剣を上回る剣を創りだしてみせる」

ロンさんの目には強い決意の炎が宿っていた。

「それではまた」

俺はロンさんに別れを告げると、ランカークスから旅立った。

本日のタケルのステータス

タケル

性別：おとこ

職業：錬金術師

レベル：6

さいだいHP：37

さいだいMP：515

ちから：20

すばやさ：16

たいりよく：20

かしこさ：256

うんのよさ：256

攻撃力：98

防御力：65

どうぐ

E：ガンブレード

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパリング

E：魔法の弾×10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛
寝る 忍び足 穴掘り

ホイミ

ヒヤド ヒヤダルコ

バギ バギマ

本日の目玉商品『ロトの剣』（後書き）

オリジナル装備……。

なんか恥ずかしくなってきた。

これって中二なんでしょうか……？

FFパクリとか言わないで下さい。

人間でも魔法剣が使える使用になっておりますです。

魔法は呪文書を手に入れることで覚えました。

本日の目玉商品『大賢者の杖』（前書き）

そろそろダイ達と出会いたいなあ…。

本日の目玉商品『大賢者の杖』

現在オレはパプニカ王国に来ていた。

この国はミスリル銀の道具や特殊な魔法の布で織られた衣服が特に有名で、一人の商人として凄く楽しみだ。

おまけにこの辺りには脅威となりそうな魔物は殆どいない。

魔王軍の侵攻の魔手もまだ伸びていないからだろう。

この国が滅びる前に貴重な物を仕入れておこう。

俺はパプニカ王国で最も活気のある商店街に足を踏み入れた。

人々が賑わい商人は自慢の品を売ろうと躍起になって呼び込みをしている。

俺は露店で売られている鳥の肉を購入してかぶり付きながら街を歩いた。

さあ魔法の布を手に入れよう！

「ふう、漸く手に入れることが出来たぞ」

街を歩くこと数時間。

目当ての布を手に入れた俺は、広場にあるベンチに腰を下ろした。パプニカ特産の魔法の布。

高い対魔力を持ち普通の布よりも遥かに丈夫に出来ている。

魔法の法衣や賢者が着ているローブなんかも、この素材が使われているらしい。

それなりに値は張ったが、それだけの価値があることは言うまでもない。

「さてと、目的の物も手に入っただし今度は俺の番だな」

俺はヨイシヨと立ち上がった。

俺の目的はパプニカの城だ。

旅の商人としてパプニカ城に持ち込みを行う算段だ。

交易国として名高いパプニカの王族。

さぞかし支払いが良いことだろう。

減んでしまう前にタツプリとゴールドを落してもらいましょう！

この国に来て今日で三日目、仕込みはバツチリ抜かりはない。
というよりも謁見に三日も待ったのだ。

城の門番に王への謁見を申し込む事から始まり、各種の手続きなど
結構な時間を食った。こういった事は国によって色々違う。

商売を行う際、大抵の国は入国の際に手続きと審査を行う。
結果問題がなければ入国と商売が認められるという流れだ。
パプニカは特にその辺りが厳しい。

俺の持つ商品は何処にも売られていない物ばかりだ。

それ故に適正価格をイマイチ判断することが出来ないらしい。

故に専門の人間を呼び審査を行う。

結果、今までで最も時間を食った。

これで売れなきゃ最悪だ。

閑話休題

現在オレは謁見の間にいる。漸く目通りが叶う。

王座の前で膝を付いて国王を待つ。

俺の隣には持ち込んだ品が台座に載せられており純白の布で隠されている。

暫くすると扉が開き、ゆっくりとした足音が近づく。

足音は王座の前で止まると、腰を下ろした。

「そなたが行商人のタケルか？」

「はっ！此度は拝謁に賜り恐悦至極にございます」

「うむ、面を上げよ」

王の言葉に従いゆつくりと顔を上げる。

威厳にあふれた表情の国王が王座に腰を下ろしていた。

なんていうか凄い存在感だな。

隣にはレオナ姫もいる。

その後ろに控えている三人組は有名な三賢者だろうか？

「聞けばそなたは我が王家の為に貴重な至宝を仕入れたとか？」

「はい、この世に無二の一品でございます。」

其れは伝説の武具にも勝るとも劣らぬ一品ばかり。

必ずや国王陛下の眼鏡に適う物だと自負しております」

「うむ、では早速見せてもらおうか」

「へえ、気になるわね。早く見せてみなさいよ」

レオナ姫が身を乗り出して先を促した。

原作通り、かなりのおてんば姫のようだ。

「これ、レオナ！」

「ごめんなさいお父様」

「ゴホン！娘が失礼をした」

「いえ……では」

俺は台座に被せてある布をゆっくりと下ろした。
周りからため息が漏れる。

この世界では伝説級の武具が五品。

そのどれもが見る者を惹きつける輝きを放っている。

本日の商品はコレだ！

大賢者の杖（使うとフバーハの効果） 50000G

天使のレオタード（死の呪文を防ぐ） 48000G

女神の盾（攻撃呪文を半減させる） 40000G

黄金のティアラ（嫌な呪文に掛かりにくくなる） 24000G

女神の指輪（歩くとMPが回復していく） 15000G

「如何でしょう？賢者の卵である姫様に」

「凄いわ！それを私のために？」

「はい、きつと姫さまにお似合いですよ」

「お父様！」

「……うむ」

レオナ姫は国王に強請る様に声を上げた。

国王はヒゲを撫でるとレオナに向かって頷きこちらを見た。

レオナ姫は嬉しそうに駆け寄ってきて杖を手にとった。
どうやら『大賢者の杖』が気に入ったようだ。
嬉しそうに眺めている。

国王はそんなレオナ姫を微笑ましい顔で見てから俺に向き直った。

「タケルとやら、そなたの用意した品々、全て貰おう」

「ありがとうございます」

「これ程の武具を取り揃えるとは誠に大儀であった。

どうだ？そなたさえ良ければこの国で店を構えてみるというのは
？」

「…………え？」

国王の言葉に俺は硬直した。

この話は一商人として、この上無い事だ。

周りの臣下達も国王の言葉に「おお！」とか感心してるし。

「確か城下の西区に一画、使われていない土地が有った筈。

どうじゃタケルよ。

その商人としての手腕をこの国で存分に振るってみては？」

「それ良いわね、タケルくん。

どう？お父様がここまで言ってくれるなんて滅多に無いわよ？」

マジですか？

それにタケルくんとな！？

まさかダイくんと同じノリで呼ばれるとは思わなんだ。

王様は俺という商人を取り込むことで国力の強化を図る気だよな？

しかしどうするかな？

魔物の動きもますます激しくなってきた今、戦力の強化は急務だ。

兵士たちの武具や食料などの物資は必要不可欠。

それを用意する商人は是が非でも欲しいだろう。

しかも俺は唯の商人じゃない。特に品揃えが。

確かに平和なら迷わず飛びつく話だ。

けど間も無くパプニ力は滅びる。不死騎団によって。

うん決めた。

「ありがたいお話ですが…」

うん。やっぱり保身が大事ですよ。

俺って正義の使徒って訳じゃないし。

装備を除けば一般Peopleですから。

「私は自分の商品をより多くの人々の為に役立てたいのです。

現在、魔物たちの動きが活発化しており、

魔王が復活したと噂されております。

確かに陛下の心遣いは大変嬉しいのです。

しかし多くの人々の為にも私は旅を止めるわけにはいかないのです」

「……そうか…あいわかった！

そなたの心意気、ワシは感服したぞ！

そこまで言うのなら引き止めることは出来ん。

これからの道中、気をつけてな」

「ありがとうございます陛下。レオナ姫もお元気で」

「またねタケル君。君の装備、大切にに使わせてもらうわ」

俺は最後にもう一度だけ一礼すると、踵を返して謁見の間を後にした。

あー、緊張したー。

さてと用事も終わったしパプニカから脱出しますかね。

次はロモスでも行こうかなあ…。

パプニカから出る前に俺は度に必要な物を買い揃えることにした。

食料の方も心許なくなってきたし新しい魔導書も有るかもしれない。

そんな訳で買い物開始。

適当な店を練歩くこと半日、保存食と魔導書を数冊ほど購入。

時刻は午後八時過ぎか。

俺は腕時計と薄暗くなった空を見て溜息を付いた。

「こりゃパプニカを立つのは明日にした方がいいな」

夜の街道を旅するのは止めた方が良い。
俺はパプニカで一泊することにした。

「いらっしやいませ。こんな遅くまでお疲れ様です。

ウチは風呂もベッドも最高ですよ！お一人様ですか？」

「あ、はい。部屋は空いてますか？」

「勿論です！お一人様だったの15Gになります」

俺は15Gぴったり手渡すと、店員に案内されて部屋に入った。

「お食事はどうなさいますか？」

「自分で用意してあるから構わない」

「風呂はソコの扉の向こうになります」

「ありがとう」

「それではごゆっくり」

俺はベッドに身を投げ出して魔導書を開いた。

呪文を覚えるためには習得した系統の魔方阵が必要になる。

魔方阵の中で祈りを捧げる事で、素質ありと認められれば魔方阵が輝き習得することが出来るのだ。俺はドキドキしながら頁を捲った。

手に入れた魔導書は3冊。

1冊目にはメラ系、ギラ系、イオ系の呪文。

2冊目にはキアリー、キアリク、シャナクなどの呪文。
3冊目にはラナ系、フバーハ、レミーラ、トラマナ……あ、ホイミ系もある。

ホイミ以外は習得してないな。

明日、片っ端から契約してみんなかな。

兎に角、攻撃魔法が習得できるのは嬉しい。

敵と正面きって殴りあうのはガラじゃないからな。
ていうか怖い。死ぬ。

「さてと、風呂に入って寝るとするか」

俺は魔導書を荷物にしまい込むと風呂に向かった。

この世界って補助呪文も少ないよなあ…。

バイキルトとかスクルト、ピオリムとか無いのかなあ。

本日のタケルのステータス

タケル

性別：おとこ

職業：錬金術師

レベル：8

さいだいHP：44

さいだいMP：525

ちから：25

すばやさ：26

たいりよく：30

かしこさ：256

うんのよさ：256

攻撃力：103

防御力：70

どうぐ

E：ガンブレード

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパリング

E：魔法の弾×10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り

ホイミ ベホイミ

ヒヤド ヒヤダルコ
バギ バギマ

本日の目玉商品『大賢者の杖』（後書き）

次回は口モスです。

本日の目玉商品『毒消し草』（前書き）

日間ランキング見て驚きました。

まさかの1位！？

練習作行き詰まってたから適当に書いただけなのに…。

本日の目玉商品『毒消し草』

現在オレは一人魔の森を練り歩いていた。

原作キャラの一人、マームに会ってみたい。

まあチョットした願望みたいなものだ。

目指すはネイルの村だ。

それにしても魔の森のド真ん中に村を作るなんて何を考えてんだろう？

もう魔王軍が復活したのは周知の事実となっている。

魔物の凶暴化もますます拍車が掛かり手が付けられないままでになっていた。

しかし魔導書によって戦闘力を飛躍的に高めたオレに怖いものなど無い！魔物でも大魔王でも掛かってきやがれ！

すいません。ウソです。

現在オレは以前と同じように聖水を巻きながら忍び足で移動中です。確かに魔導書に載っていた呪文は全て契約できた。

しかし実際に魔の森の魔物と進んで戦うほど俺はバカじゃない。

この森の魔物は今まで旅をしてきた地域の魔物よりも強いのだ。

何故なら獣王の支配する森だからだ。

そこに住む百獣魔団は半端じゃない。

ライオンヘッドを見た時、俺はチビリそうになったくらいだ。

あれは怖すぎる。

俺の知識にあるライオンよりも一回りでかかった。

しかも羽とか生えてたし。

ライオンヘッドに気付かれない様に逃げ出した俺は気を取り直してネイルの村を目指す。それでも偶に魔物に見つかって襲われたりもするが…。

「ベギラマ！」

「ギャアアアア！！」

習得したての呪文で焼き払う。

俺の放った閃熱呪文はリカントと人面樹を薙ぎ払った。

うん、流石はベギラマ。かなりの威力だ。

この世界はギラ系が強い。

なにセイオナズンよりもベギラゴンの方が強いっぽいのだ。

メラゾーマやイオナズンよりもベギラゴンですよ。

ハドラーもベギラゴン習得した時、メチャクチャ喜んでいたしな。

俺にもギラ系の素養があって良かった。

「おっとレベルアップか」

頭の中でファンファーレが響く。

何度も聞いているのもう慣れた。

多分この音楽、俺しか聞くことはないんだろうなあ。この世界の人々は、魔物と戦闘以前に普通に修行でレベルアップするみたいだし。レベルアップって結構凄いと思う。

元の世界に戻ったら間違いなく運動神経チートだよな。

普通に長剣を振り回せる腕力は付いた。

重い荷物を担いだまま走りまわる体力もある。

「でもなあ」

それでもこの世界だと本職の戦士には全く敵わない。

まあ俺は魔法で戦う後衛系ですから。

守ってくれる前衛いないけど…。

「さてと、そろそろ到着してもいい筈だけどな」

俺は地図を見ながら辺りを見渡した。

前方に明かりと煙が見えた。

どうやらネイルの村の様だ。

俺は歩く足を早めた。

素朴で平穩。

それがこの村の第一印象だった。

入り口から村全体が見渡せるほど小さな村。

家も数える程しか建っていない。

中心の広場を囲むように建てられた民家。

見たところ宿屋は無いみたいだ。

商売を行うにしても、あまり高価なものを買う余裕はないだろう。

マームになら安く売ってやっても良いが…。

何せアバンの使徒の強化は平和に繋がるからな。

それにマームは可愛いしな。

「それにしても良い村だなあ」

この村を歩いてみると、世話になった村を思い出す。

見ず知らずの俺を受け入れてくれたあの村を。

皆元気にしているかな？

1年ほど前に旅立ってから一度も戻っていない。

暇を見て帰ってみるのも良いかもしれない。

「きゃっ！」

その時だった。

俺は何かにぶつかった。

考え事をしていたのが良くなかった。

女の子だった。十歳前後の可愛らしい女の子。

俺にぶつかった拍子で尻餅を付いている。

「大丈夫か？ごめん、考え事をしていたんだ」

俺はそう言いながら女の子の手を取って起こして上げた。

「こっちこそゴメンナサイ。えっとお兄ちゃんは？」

「ああ、俺は旅の商人で先刻この」

「お兄ちゃん商人さんなの！？」

「あ、ああ」

「だったら毒消し草ありますか！？」

「勿論あるよ。だれか毒に侵されたのかい？」

「お、お母さんが、バブルスライムに噛まれて…」

俺が事情を聞くと女の子は目に涙を浮かべて肩を震わせた。
成る程、お母さんの為か…。

こんな女の子からお金を取るほど俺は強欲じゃない。

それに毒消し草は魔の森で採取してある為、多く持っている。
それに毒消し草を使う必要はない。

「あの、毒消し草……これで足りませんか？」

女の子はお金を差し出した。

1G硬貨が5枚。

毒消し草の値段は10G。

女の子は不安そうに俺の顔を見上げている。

俺はそっとお金を持った手を引かせた。

「大丈夫、お母さんの所に案内してくれるか？」

「…う、うん！」

俺の言葉に女の子の表情がパアツと明るくなった。

女の子の家に案内された俺は、彼女の母の前に立つ。

ベッドに横たわっている母の顔色は悪く、息を苦しそうだ。

俺は女の子に「大丈夫だよ」と声をかけると母親に手をかざした。

キアリー（解毒呪文）

覚えておいて良かった解毒呪文。

魔法の光に包まれた母親は見るうちに顔色が良くなる。

「お母さん！」

光が収まった時、母親は安らかな寝息を立てていた。

「これでもう大丈夫だ」

「ありがとうお兄ちゃん！」

お兄ちゃんか。

悪くないなその呼び方。

「……私は」

「お、気がついた」

「お母さん、大丈夫？」

「ミーナ……心配掛けてごめんなさい」

女の子は嬉しそうに母親に抱きついた。

それから暫くして。

「本当に何とお礼をつていいか」

「本当にありがとう！」

「いえ、こんなに美味しい料理を御馳走になれたんです。

むしろコチラが感謝したいぐらいですよ」

「まあ！おかわりは沢山ありますからいっぱい食べてくださいね」

俺は母親を助けたお礼にと晩御飯をご馳走になっていた。
女の子の名前はミーナ。

なんと彼女は、たった一人で魔の森に毒消し草を取りに行くつもりだったのだ。

魔王復活のため凶暴化した魔物の影響で。村になくなった行商人
その所為で村の蓄えも充分とは言えなかった。

以前買っておいた毒消し草も数日前に無くなっていたのである。
街まで行こうにも森は大変危険である。

それでも母の為にミーナは一人でも森に向かおうと考えたのであつた。

ミーナの母、おばさんは「危険なことはいしないで」と説教をして、
改めてオレにお礼を言っ頭を下げた。

「邪魔するぞ」

「あ、村長様」

家に入ってきたのは優しそうな老人だった。

老人、村長はおばさんを見ると、不思議そうに首をかしげた。

「ふむ……見舞いに来たのじゃが…、お前さん、もう大丈夫なのか？」

「はい、この方の解毒呪文のおかげで」

「そうか、村長として礼を言っぞ」

「いえ…」

「という事はマームとは入れ違いになったのか」

「どういうこと？」

「ふむ、マームのやつがミーナが森に向かったと勘違いしての」

「マームおねえちゃんが！？」

「……なあに、あの娘なら心配はないじやろう」

「えっと……心配ないって？」

女の子なんですよね？オレも魔の森を通って来たんですけど

あの森は凶暴な魔物がいてかなり危険なんだけど……」

原作知識はあるけど一般人なら当然の疑問を突っ込んでおきましよう。

するとミーナが自信満々に言った。

「大丈夫だよ、お兄ちゃん」

「どういうことだい？」

「マームおねえちゃんは凄く強いんだから！」

「そうじゃな。何せ『アバンの使徒』じゃからのう」

「凄いな！じゃあアバンの使徒に会えるのかな」

「それだけじゃないぞ。」

マアムの母レイラは嘗て勇者アバンと共に戦った仲間じゃ」

「へえ、英雄の村って事か」

オレが感心したふうに言うと、村長はフムと考えこむようにヒゲを撫でた。

「ふむ、お前さん、魔の森を抜けて来たんじゃないかな」

「はい、結構ヤバかったですけど…」

「物は相談なんじゃがお前さん、マアムを探してきてくれんか？」

「えっと」

「知っての通り、マアムはミーナを探しに行った。」

ミーナがここに居る事をマアムは知らん。

このままだと何時までもミーナを探して森を歩き続けるかも知れん」

村長の言うことも一理ある。

でも正直言って遠慮したい。

それにもう日も沈んでおり外は薄暗い。

この状態で魔の森を歩くのはマジで怖い。

俺は戦士じゃないしがない商人だ。

けど…。

「お兄ちゃん…」

この顔には勝てん。

ミーナちゃんは縋るような上目づかいで俺を見ている。

「村長さん」

「なんじゃ？」

「この村の人達が毒消し草を採取する場所、教えてもらっても？」

マームさんはミーナちゃんを探してそこに向かうと思うんです」

「そうじゃな。毒消し草の群生地はここからそう遠くはない。

村を出てロモスの方角に行くと、川が流れておる。

その川にそって南に下れば直ぐじゃよ」

「お兄ちゃん、マームお姉ちゃんを呼んできてくれるの？」

「ああ、すぐに戻るよ」

「すまんのう」

俺は心の中で膝をつき溜息を付いた。

また魔の森を一人で歩くのか…。

しかしその不安以上にマームに会えるのは楽しみだ。

こうなったら腹をくくるしか無い。

平和なドラクエ世界を取り戻すにはアバンの使徒に頑張ってもら
しか無い。

でないと商売上がったんだ。

俺は荷物を背負うと、ネイルの村の入口を目指して歩き出した。

「後で村長に毒消し草、買ってもらおう」

タケル

性別：おとこ

職業：錬金術師

レベル：11

さいだいHP：71

さいだいMP：536

ちから：29

すばやさ：36

たいりよく：37

かしこさ：256

うんのよさ：256

攻撃力：107

防御力：75

どうぐ

E：ガンブレード

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパージング

E：魔法の弾×10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り

ホイミ ベホイミ

キアリー キアリク シャナク

メラ メラミ メラゾーマ

ギラ ベギラマ

ヒヤド ヒヤダルコ

バギ バギマ

フバーハ

ラナリオン

トラマナ レミィラ

本日の目玉商品『毒消し草』（後書き）

今回は短いです。

次回はダイ達に会いたいなあ…。

そういえば体力ってHPの成長に関係してるんですよ？
レベルが上がった時、体力×2のHPになるんじゃないっけ？

主人公設定（前書き）

予約投稿始めてです。

主人公設定

名前：大江 おおえ 武 たける

年齢：16歳

身長：164cm

体重：54kg

この二次創作のオリ主。

現代日本の男子高校生。

成績は比較的優秀。しかし天才ではなく秀才。

好奇心が強く順応性が高い。

ドラクエと少年漫画が好き。

ダイの大冒険の世界では性は名乗らず名前だけ名乗っている。

自称どこにでもいる普通の行商人。

平和な時代に結構荒稼ぎした為お金が大好き。

しかし魔王軍復活と原作キャラとの遭遇でダイの大冒険の世界だと気づき、魔王軍と戦う勇者メンバーになら役に立つ武器や道具を譲っても良いと思っている。

全ては平和なドラクエ世界の為。

魔法の才能は天才の部類に入り、現在手に入れた全ての魔法と契約を成功させている。色々な特技にも精通している。

現在のステータス

レベル：12

さいだいHP：75
さいだいMP：536

ちから：32

すばやさ：40

たいりよく：38

かしこさ：265

うんのよさ：256

攻撃力：110

防御力：77

どうぐ

E：ガンブレード

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパリング

E：魔法の弾×10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り 大防御

ホイミ ベホイミ

キアリー キアリク シャナク

メラ メラミ メラゾーマ

ギラ ベギラマ

ヒヤド ヒヤダルコ

バギ バギマ

フバーハ

ラナリオン

トラマナ レミーラ

主人公設定（後書き）

描写はないですがマームとの出会い前に魔物との戦闘によりレベルアップです。

本日の目玉商品『星降る腕輪』（前書き）

予約投稿その2

本日の目玉商品『星降る腕輪』

鬱蒼とした森をひたすら歩く。

村長に言われた通り、ロモスの方角を目指して歩く事十数分。
水が流れる音が聞こえ始めた。

川を発見した俺は、川にそって南に向かう。

「ギャアアアア!!!」

いきなりの事だった。

けたたましい叫びが響き渡った。

俺は声の方へと走る。

「うわっ！」

俺は火達磨になって逃げていくリカントとすれ違う。

何が起こったんだ？

俺はリカントが来た方へと走った。

少し進むと男女の声が聞こえてきた。

何やら言い争っているみたいだ。

「こんな森ぐらいスパッと通り抜けてやるわい！」

「その程度の腕で？」

「なんだと!？」

電流が走ったように睨み合う男女とオロオロと見守る少年。
これが原作遭遇ってやつか。

「行こうぜ！ダイ！」

「ちょ、ちよつと！ポップウ〜」

ポップはダイを引っ張って行ってしまった。

あゝあ、ロモスの方角はそっちじゃないって…。

おっと、ここで眺めていても話は進まない。

村長とミーナにも頼まれているし、とりあえず俺は声をかけることにした。

「ちよつといいか？」

「だれ！？」

「怪しいもんじゃないよ。えっと、もしかして君がママムさん？」

「ええ、どうして私の名前を？」

「ネイルの村の村長さんに頼まれてね。君を呼びに来たんだよ」

「え？で、でもミーナが…、女の子が一人で森に入ったの」

「大丈夫、ミーナちゃんは無事さ。今はお母さんと一緒にいるよ」

「ええっ！？」

「言いくいんだけどさ。ミーナちゃんは森に入ってたんだ」

俺はママムに事情を説明した。

マアムはミーナが一人で危険な森に入っていない事に安堵し、また母親が無事だったことも心から喜んだ。
マジで良い娘さんだ。眩しすぎる。

「ありがとう。ミーナの事もおばさんのことも…」

「べ、べつに良いよ」

「……あれ？」

「どうした？」

「これは…」

マアムの視線を追ってみると、丈夫そうな布袋が落ちていた。

「さっきの二人が落としたのかしら？」

「みたいだね。ここに置いておくのも何だし、取り敢えず持って行こうか？」

「そうね」

「改めて自己紹介するよ。俺はタケル、商人だよ」

「知っているみたいだけど、私はマアムよ。」

ミーナとおばさんの事、本当にありがとう」

「いいよ。それよりもあの勇者アバンの使徒なんだって？
凄いカッコイイよな。オレ、憧れるよ」

マジで。

遠目から魔弾銃を撃つところ見てたけど、マジでカッコよかった！
本物はやっぱり違うわ。

「そ、そんな事ないわよ」

「いやいや、本当に凄いつて！」

オレなんて最低限の自衛能力しか身につけてないからさ」

「へえ、でも一人でこの森を抜けてくるのは素直に凄いと思うわよ」

「はは、おっと！それよりも早くミーナちゃんを安心させてやらな
いと」

忘れるところだった。

マアムと会えてテンション上がりすぎだろオレ。
それに魔の森で立ち話は危険過ぎる。

マアムには何でもないけどオレに命の危険。
早く帰らないとヤバイ。

「そうね！急いで村に戻りましょう」

「あ、帰ってきた！マアムお姉ちゃん！」

村に入ると、ミーナちゃんと村長さんが迎えてくれた。

どうやら入り口で待っていてくれたみたいだ。
それに村の人だろうか。

皆が入り口に集まってきた。

一人を心配して村人が全員やってくるなんて本当に良い村だな。

「ただいま、ミーナ」

「マーム。ご苦労じゃったな」

「結局無駄足でしたけどね」

「なに、無事で何よりじゃわい」

「俺からも礼を言うよ。娘のために有難う」

ミーナの父親だろうか。

中年の男性がマームに頭を下げた。

「お礼なら私よりも、このタケルに言っただけで」

「ありがとう、妻の治療まで行なってもらって」

「いや、良いよ」

なんだかしんみりした空気になったな。

村長が申し訳なさそうに口を開いた。

「マーム…お前にはすまないと思っておる。」

この村には男手が少ない。いつもお前には危険な目に」

「みんな城を守りに行ってるもの。仕方ないわ」

「ウム、国王が倒れてしまっではお終いじゃからのう」

皆の表情は更に暗いものになる。

いくらアバンの使徒とはいえ、マアムの様な娘がたった一人で村を魔物から守っているのだ。村の人たちも心中穏やかじゃないだろう。そんな村人たちに、マアムは励ますように明るく言った。

「大丈夫よ！この村は私が守るわ！」

漫画で見るのとは訳が違う。

この世界を一人で旅をしてきたから分かる。

魔物の脅威を。

その驚異からたった一人で守ろうと言うのだ。

すごい勇気だ。

それに比べてオレは…。

「そうだよ！マアムお姉ちゃんは魔物^{モンスター}みたいに強いんだ！」

「そうだね！大丈夫さ！」

「こら！だれが魔物ですって！」

「あははは！」

子供達の言葉にゲンコツで答えるマアム。

雰囲気は一気に明るくなり、村人たちに笑顔が戻った。凄く、これがアバンの使徒か…。

「ねえ、お姉ちゃん。それ何？」

ミーナはマアムの持つ布袋を指さした。

「ええ、森で出会った妙な二人組が忘れていったのよ」

「開けてみようか？」

いたずら心と好奇心か。

子供が布袋の紐を解いて開ける。

すると、その隙間から黄金の光が放たれた。

ポン！

そんな音と共に飛び出てきたのは一匹のスライムだった。

「スライムだ！」

「離れて！」

魔物の出現。

マアムはこれまでの経験に基づき反射的に魔弾銃を抜いた。

金色のスライムはいきなり人間に囲まれて困惑している。

そしていきなりマアムに銃口を向けられ怯えた表情を見せた。

銃口とマアムの鋭い眼光、スライムは耐えられずに…。

「……………ピ、ピエ~~~~ン!!!!」

泣き出してしまった。

「いじめちゃ可哀想だよ」

全くもってその通りである。

ミーナちゃんは正しい！

マームはミーナに言われてバツが悪そうに銃をしまった。

一方その頃

魔の森の奥深くにある洞窟。

太陽の光を全く通さない最奥では一匹のリザードマンが寝息を立てていた。

ただ、普通のリザードマンとは大きさも威圧感も一線を画している。

「クロコダインよ……獣王クロコダインよ」

低く威圧的な声がリザードマンに掛かる。

声に反応してリザードマンが目を開いた。

「誰だ？何のようだ？」

視線の先には何本もの触手を生やした目玉の怪物『悪魔の目玉』が洞窟の天井に張り付いていた。声は悪魔の目玉から発せられている。

「クロコダインよ」

悪魔の目玉の眼球から映しだされたのはクロコダインの上司。

魔軍司令ハドラーだった。

「おおっ！これは魔軍司令殿！失礼をした！」

クロコダインは武人としての礼儀を取り姿勢を正した。

「どうしたのだ？お前にはロモス王国の攻略を命じていたはず」

だというのに洞窟で眠っていた部下にハドラーは鋭い眼光を向けた。クロコダインはその視線を受け流して頭を振った。鼻で笑う。

「だめだ　だめだ、あの国は…。」

吹けば飛ぶような腰抜けばかりよ。強い奴など一人もおらんわ」

クロコダインの言い分、それは団長たる自分が出るまでもない。配下の魔物たちに任せておけば後数日ほどでロモスを攻略できるとの事だ。

「相変わらずだな…。だが今日はその件ではない。

我が魔王軍に楯突く輩が今、魔の森に迷い込んでおるのだ。

お前の手で始末してくれ」

「なに？どんな奴だ！？」

悪魔の目玉が映し出しているモノが変わる。

映しだされたのは自分がよく知る場所、魔の森の風景。

そして森を歩く二人の少年。

少年の一人の方の顔が大きく映しだされた。

まだ十歳を過ぎたばかりに見えるあどけない表情の少年。

「こいつだ……名はダイ…ッ！」

クロコダインは顎が外れんばかりに大口を開けて固まった。まさか軍団長たる自分に勅命が回ってきたと思えば、倒す相手は人間の少年だったのだ。この上司は何を考えているのか。そう思うと呆れるのを乗り越して笑えてくる。

「くく……、ワハハハハ！」

「何がおかしい？」

「冗談は止めてくれ。」

仮にも獣王と呼ばれる俺に、こんなガキの相手をしろというのか？」

「ガキだと侮るな！コイツは信じられないような底力を秘めておる」

ハドラーは何かを思い出したように忌々しそうに拳を握りこんだ

「…この俺も手傷を負わされたわ！」

「なんだと！？ハドラー殿に傷を！？」

クロコダインはハドラーの告白に驚愕した。

「そつだ！まだ力を付けていない内に殺さねば必ずや我等が難敵となり立ちふさがらるだろう……」

「ぐふふ……、面白いつ！」

クロコダインは口を吊り上げながら立ち上がった。

その表情は歓喜に震えている。

好戦的な笑を浮かべながら側にあつた大斧を手を取った。

「ハドラー殿を傷つける程の小僧……っ！

是非とも戦つてみたくなつたわ！」

その眼光は武人としての誇りに溢れていた。

クロコダインの表情にハドラーは確信した。

コイツならば間違いなくダイを葬ることが出来るだろうと。

「では任せたぞ……確実に葬れ！」

悪魔の目玉はその瞳を閉じた。

「かわいいっ」

ネイルの村にあるミーナの家。

先程の金色のスライムが机の上にいた。

ミーナはぶるぶると揺れるスライムと遊んでいた。

幻の珍獣ゴールデンメタルスライム。

知る人ぞ知るまさに生きた宝石。

それよりも……。

（神の涙か……）

原作知識。

オレはゴメちゃんの正体が『神の涙』だと言う事を知っている。

あらゆる願いが叶う願望機。

ゴメちゃんに願えば元に世界に帰れるかも知れない。

しかしオレは直ぐに頭を振った。

正直に言つて、オレは元の世界にあまり未練はない。

高校生だったオレがこの世界にきてもう一年以上の時が経つ。

戻ったところでどうなるというのか？

学校は面倒臭いと感じていたし、卒業後の進路も全く見えてなかった。

しかしこの世界は居心地が良かった。

スキルの恩恵で商売は順調だったし、好きなドラクエ世界の武具や珍しい道具を手元においてある現実は本当に気分が良かった。

魔王軍によって平和が脅かされているが、いずれダイ達が世界を救ってくれる。

今の生活を捨てて元の世界に戻るのは抵抗感が生まれるのだ。

（やっぱり戻りたくないな……叔父さんには悪いけど）

現実世界の便利な文明の利器と様々な社会のしがらみ。

ドラクエ世界の自由な生活と魔物の脅威。

天秤にかけると矢張り自分に帰る選択はなかった。

それに自分には両親はいない。昔交通事故で亡くなっている。世話になっている叔父も負担がなくなると言えば都合が良い。

（それに『神の涙』にちよっかい掛けて魔王に知られる訳にはいかない）

オレは思考を切り替えた。

マームは壁にもたれ掛かってスライムを見ている。

無害とはいえ、魔物とミーナを一緒にするにはまだ心配なのだ。

「どうしたもんかしら？」

「マアム、その二人組み、もしかしてロモスに行くって言うてなかった？」

「どうしてそれを？」

「いや、ネイルの村を素通りしたんだ。一番近い街はロモスだろ？」

「そうね……」

「で、どうするんだ？あの子、届けるのか？」

「そうね。今頃困っているかもしれないし……」

マアムはため息を付いて言った。
その時だった。

ドオオオオン！！！！！！

大きな地響きが響き割った。

マアムは顔色を変えて外に飛び出した。

オレも後に続く。

外に出るとマアムは軽い身のこなしで屋根に飛び上がった。

「森が燃えてる……」

轟々と燃え盛る魔の森。

これは只事じゃないだろう。

マアムは直ぐに家の中に戻ると、置いてあった武器を取った。

ハンマーロッド。

強い打撃力を持つが、その重量の為に鍛え上げた戦士にしか操れない武器だ。

「マアム、もしかして行くのか？」

「ええ、これは只事じゃないわ。タケルはミーナとここに居て」

マアムはオレの返答を待たずに駆け出した。
不意にズボンがギョツと掴まれた。

「お兄ちゃん……」

ミーナは不安そうな表情をオレに向ける。

オレはマアムの後を追うつもりはない。

何故なら行く必要がないからだ。

俺が何もしなくても、ダイ達はマアムの助けで生き残る。

それにクロコダインなんて化物、俺が行っても意味が無いと思うのだ。

しかし……。

「後を追う気、無かったんだけどな」

「え？」

俺はミーナの手を優しく取ると腰を下ろしてミーナと同じ高さで視線を合わせた。

この世界が原作通りに進むかどうかはまだ分からない。

正直怖い。でもそれ以上に興味がある。

今から急いで追えば間に合うかもしれない。

俺は道具袋から『星降る腕輪』を取り出した。

「ミーナちゃんは、家から出ちゃ駄目だよ」

オレは星降る腕輪を装備した。

「お兄ちゃん…」

「ちょっと行ってくるよ」

オレはマアムの向かった先、燃える森に向かって駆け出した。

本日のステータス

レベル：12

さいだいHP：75

さいだいMP：536

ちから：32

すばやさ：80

たいりよく：38

かしこさ：265

うんのよさ：256

攻撃力：86

防御力：97

どうぐ

E：砂塵のやり

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパリング

E：星降る腕輪

E：魔法の弾×10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り 大防御

ホイミ ベホイミ

キアリー キアリク シャナク

メラ メラミ メラゾーマ

ギラ ベギラマ

ヒヤド ヒヤダルコ

バギ バギマ

フバーハ

ラナリオン
トラマナ
レミーラ

本日の目玉商品『星降る腕輪』（後書き）

オリ主の正義に目覚めたとも見える行動。

ですが結局は保身に繋がります。

自分は魔王軍怖い戦いたくない。

でも戦いを間近で見たい好奇心もある。

ダイ達は世界を救う。

もしも万が一にでもダイが負ければ世界は滅ぶ。

結果、自分の平穏な商人生活は永久にやってこない。

だったら手助けすれば良いじゃないか？

役に立つ武器や道具もあるしやバくなれば逃げれば良くね？

キメラの翼があれば屋外なら逃げられるだろう。

一応、主人公の思考回路です。

結構ひどい奴に映るかもですが、道具系のチートを得ただけの男子学生なんてこんなものかな？

本日の目玉商品『砂塵のヤリ』（前書き）

ここから少しずつオリ主の成長…。

いえ、周りからの勘違いが始まります。

オリ主の保身と好奇心に繋がる行動が結果……。

本日の目玉商品『砂塵のヤリ』

現在オレは魔の森を駆けていた。

流石は『星降る腕輪』と言っべきか。

今まで体験した事の無い感覚だ。人間ってこんなに早く走れるのか。めまぐるしく流れる風景に感心しながらオレは更にスピードを上げる。

暫く走ると森の間に人影が二人見える。

マームがポップに詰め寄っているみたいだ。

「まさか、見捨てて逃げてきたんじゃないでしょうね！」

「ち、ちち　違っ、ちがつ！」

「じゃあどうしてのよ！ええ！？」

マームは激しい剣幕でポップを怒鳴りつけている。

「…っ！？」

ライオンヘッドが倒れている。

おそらくマームがぶっ飛ばしたのだろう。

だが…。

倒れているライオンヘッドがゆっくりと起き上がった。

「あぶない！伏せろ！」

咄嗟の事だった。

オレは反射的に掌をライオンヘッドに向けていた。

多分、ポップとマームを案じてでは無いと思う。

ライオンヘッドの怒りに狂った表情にオレの防衛本能は警報を鳴らしている。

オレは力の限り叫んだ。

「バギマアアッ！！！」

放たれた風は渦巻き木の葉や枝、小石を巻き込みながらライオンヘッドに吸い込まれた。

「ギアアアアアッ！！！」

うっう、グロい…。

ライオンヘッドは全身を切り刻まれながら吹き飛ぶ。

血を撒き散らしながら前足が、羽が尻尾が真空の渦から飛びだす。風が止むと、そこにはグチャグチャのスプラッタ状態の肉塊が残った。

マジで怖かった…。

こりゃ暫く肉は食えないな。

「あ、ありがとうタケル。でもどうしてここに？」

ポップから手を離れたマームが話しかけてくる。

「いや、それは…」

い、言えない。

好奇心に負けたなんて。

マームは少なくとも命がけで村を出た筈。

オレもある意味命がけだけど、全ては保身に直結する。

好奇心は猫を殺す。行動に矛盾があるがオレは好奇心に負けた。
やっとの思いで搾り出した答えは…。

「し、心配だったから…」

「そう、ありがとう…」

「いや、それよりも、もう一人の子は？」

「はっ！？そうだったわ！」

「ちょ、ちよつとも待てよ！もしかして助けに行く気か？」

「当たり前でしょ！？あんたそれでも仲間なの！？」

「さっき言っただろ！？現れたのは軍団長の一人！
とんでもないバケモンだったんだぞ！？」

ちよつと待て！？

本気で行かないつもりかポップ！

それは不味い！

ダイが死んだらどうしてくれるんだ！？

「だから急ぐんだろうが！あの子が死んでも良いのか！？」

「うぐっ！？」

オレの激しい一括にポップは口ごもった。

「さっさと案内しろ！ケツ蹴っ飛ばすぞ！」

「どわっ！わ、わかったよ！」

後で自分を殴ってやりたいと思った行動だった。

何様だよオレ…。

ダイが死ぬ「魔界浮上」人類滅亡「オレ死亡」。

この公式が頭に浮かんだオレはかなり必死だったと思う。

今のオレならクロコダインとだって表面きつて立ち向かえるはず。
オレとマアムはポップの後を追った。

……無理。

何が無理だった？

クロコダインと正面切って立ち向かうだよ！

オレの視線の向こうではクロコダインがダイと対峙していた。

掲げた巨大な斧が、激しい突風を生み出している。

あれが真空の斧だろう…。

つか怖すぎる！

殺気で目をギラギラさせた二足歩行の巨大なワニ。

メチャクチャ怖い！

アレと睨めっこだって出来るか！

そしてオレはダイの凄さに驚愕した。

だってたった一人であの化物と戦ってるんだ！

さすが勇者様だよ。

「今だ！海破斬！」

ダイはクロコダインが放った真空の刃を切り裂いた。

海破斬の衝撃波はクロコダインの鎧を裂き、後退させる。

「何イ!?!」

ダイは好機とばかりに飛びかかった。
しかしそれは悪手だった。

「カアアッー!!」

「うわっ!」

突如吐き出された激しい息吹^{プレス}攻撃。
空では身動きの取れないダイはまともに食らってしまふ。
ダイの全身を焼け付くような痛みが襲う。

焼け付く息^{ヒートプレス}

クロコダインの切り札だ。

コレを受けた者は、全身が麻痺し動けなくなってしまうのだ。

「オレに傷を負わせるとは噂通り大した小僧だ」

しかし。

それでもダイは身体を引きずって落とした武器^{ナイフ}を取ろうとする。

「もう寄せ、お前はよく戦った。

オレは勇者を名乗る大人の戦士と星の数ほど戦ったが…
それでもお前の方が余程強かったぞ」

クロコダインは止めとばかりに真空の斧を振りかぶった。

「少々惜しいが楽にしてやる」

ヤバイ！

ダイのピンチ！

「ダイーっ！」

ポップは走りながら杖を構えた。

「そうはせん！」

クロコダインは真空の斧を使い突風を生み出す。

「これじゃあ近づけない！」

マアムは徐に魔弾銃を取り出した。

銃口をクロコダインに、ではなく倒れているダイに向けた。

「おい！何処狙ってるんだ！敵はクロコダインだぞ！

おい！…や、やめろ！…っ！…っ！…っ！」

ポップの制止の叫びと同時に引き金が引かれた。

放たれた光線はダイへと吸い込まれる。

「なにするんだ！？気でも狂ったのかよ！」

「落ち着いて！ほら！」

マアムの指先を追うと、ダイの体が回復魔法の光に包まれていた。焼け付く息によって傷ついた身体は見る見るうちに元に戻り…。

「う、動く……動くぞ！」

「おのれ！」

ダイは起き上がってナイフを拾い上げるとクロコダインと距離を取った。

「いったいどうなってるんだ？」

「もしかしてキアリクか？」

「そうよ」

オレの回答にマームは肯定して魔弾銃から弾を抜き取った。

「キアリクを込めた弾を撃ってあの子を助けたの」

魔弾銃。

火薬の代わりに様々な魔法を込めて撃つ鉄砲。

原作同様にマームは説明してくれる。

商人としては欲しい一品だぜ。

話し込んでいる間に再びオレたちを突風が襲う。

見るとクロコダインが再び真空の斧の力を発揮していた。

オレたちを近づけない気か！

今のダイでは一人でクロコダインを倒すことは出来無い。

「あの武器を何とかしないと……」

マームは閃いたようにポップに聞いた。

「そうだ！あんた、氷系呪文^{ヒヤドル}出来る！？」

「おお！オレの氷系呪文^{ヒヤドル}と言えば天下一品と評判で…」

「貸してくれ！」

「あ！」

ポップの自慢に付き合ってるヒマはない。

オレはマアムから弾丸をひったくると呪文を唱えた。

『ヒヤドル』
『氷系呪文』

弾丸に確かに吸い込まれる感覚。

それを確認したオレはマアムに弾丸を手渡した。

「マアム！」

「…え、ええ！」

一瞬戸惑いを見せたマアムだったが直ぐに気を取り直して弾丸を魔弾銃にセットする。銃口を真空の斧に向けた。

「死ねいっ！！！」

「今だ！」

ダイに向かって斧を振り下ろす瞬間。

マアムは狙いを付けて引き金を引いた。

ヒヤダルコの呪文を込めた弾丸は見事に斧に命中。

「うお…、おおおっ!?!」

真空の斧はビキビキと音を立てて凍りつく。

氷はクロコダインの腕まで覆い込んだ。

ダイがこの機を逃すはずがなかった。高く跳躍する。

「クロコダイン!これでもくらえ!!」

「しまった!朝日がつ!?!」

ダイの背後の太陽光によって目を塞がれたクロコダイン。

「でやあああああ~~~~っ!?!」

ダイの会心の一撃がクロコダインの片目を奪った。

「ぐわあああああ~~~~っ!?!」

ズン…!

轟音を立ててクロコダインは大地に倒れ伏した。

「ダイーッ!?大丈夫かーっ!」

オレたちは倒れかけているダイの体を駆け寄って支えてやった。

「ポップ…、ひでえよ、逃げちゃうんだもんな…」

「いや…あ、あはは…」

ダイの言葉にマームはポップを睨みつける。

ベホイミ
「回復呪文」

オレはダイにベホイミを掛けながら、クロコダインに注意する。
このまま終わる訳がない事を知っているからだ。

「あ、ありがとう……」

「あなた、回復呪文まで…もしかして賢者？」

「いや、商人だよ。呪文の才能だけはあったみたいで…っ！」

クロコダインが起き上がった。

ダイ達もオレの表情を見て視線の先を見る。

そこには片目を潰され怒りの形相を向けるクロコダインがいた。

「グウウ……」

よ、よくもオレの力才に…いや！

オレの誇りに傷を付けてくれたな…っ！…っ！…」

その表情にオレの身体は完全に硬直していた。

蛇に睨まれた蛙である。本当にこんな状態があるのか！

マジで怖すぎる。つくづく思う。

チートな能力を得ても所詮オレはしがない学生でしかない事を。

「お、覚えているよ！

……ダイ！お前はオレの手で必ず殺す！！！」

その形相に恐怖を覚える一行。
クロコダインは鬨気の塊を地面に向けて放った。
そして出来た穴に飛び込んで姿を消した。
どうやら助かったみたいだ。
緊張が切れたオレはその場にへたり込んだ。

「どうにか助かったな…」

「そうね。それにしてもタケルには驚かされたわ」

「いや、オレもアバンの使徒の凄さを改めて知ったよ」

「「ええ!?!」」

オレの言葉にダイとポップが目を向いて驚いた。

「お、オレも!俺達も、アバン先生の弟子なんだよ!」

「そ、そうなの?」

ポップとダイは首飾りを取り出して言った。

「アバンの印…」

マムも胸元から『アバンの印』を取り出した。
マジで乳でけーな…。

「そうだったのか…道理で強いわけだ」

ダイは納得したように微笑んだ。

「どうだ？傷の方は？」

立ち上がってダイに聞いた。

「もうすっかり。爺ちゃんのベホイミよりきくよ」

そりゃ光荣だな。

こうやってダイの傷を治すのも好感度アップの為。

そりゃ子供が傷つくのには思うところはある。

でもそれ以上にダイに死なれるのは不味すぎるのだ。

オレの平穩を取り戻してくれるのはダイ達だけなのだから…。

「攻撃呪文に回復呪文…おめえ、賢者か？」

「マアムにも言ったけど聞こえてなかったのか？」

オレは唯の旅の商人だよ。呪文がちょっと得意なだけな」

「でも本当に凄いと思うわ。

ここに来る時も私たちの足についてきたんですもの。

かなり鍛えたんでしょうね？」

「へえ」

ダイも感心したように俺を見た。
いいえ。

星降る腕輪の力です。
そんなに尊敬の眼差しで見ないで下さい。

「あれ？その傷…」

マアムは俺の腕を取った。

何時の間にか腕から血が流れている。

「多分、どこかで枝にでも引っ掛けたんだろう。
こんな傷くらい舐めときゃ治るよ」

「ダメよ」

マアムは回復呪文を唱えて傷を直してくれた。
人に回復呪文を掛けてもらったのは始めてでちょっと感動。

「あ、ありがとう…」

「どういたしまして」

その様子を見ていたポップが遠慮がちに頭をかきながら言った。

「あ、あの…、俺にもひとつ回復呪文を…」

ベチ！

マアムは薬草を投げつけて返答した。

「はい薬草」

「て、てめえ！なんだよこの待遇の差は！？」

「臆病者と勇者の差でしょう？この人は商人なのよ？」

ごめんなさいポップ、マームさん…。

俺は臆病者です。断じて勇気なんて無いです！

これで次回の戦い逃げれば幻滅されるかな？

「本当は臆病者です！」なんて今更言えない…。

澄まし顔で無視するマームと喚くポップ。

ダイはその様子に思わず笑い声を上げていた。

（せっかく逃げる為に用意した砂塵のヤリ、意味なかったな）

いざとなればマヌーサの効果で逃げようと思っていたが…。

無駄になったのは喜ぶべきか残念がるべきか…。

俺は日の登り始めた空を眺めながら溜息を付いた。

「ああ…これで魔王軍に目を付けられたかも…」

まだ大丈夫、だよな？

本日のステータス

レベル：15

さいだいHP：89

さいだいMP：546

ちから：42

すばやさ：100

たいりよく：45

かしこさ：275

うんのよさ：256

攻撃力：96

防御力：107

どうぐ

E：砂塵のヤリ

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパリング

E：星降る腕輪

E：魔法の弾x10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り 大防御

ホイミ ベホイミ
キアリー キアリク シャナク
メラ メラミ メラゾーマ
ギラ ベギラマ
イオ イオラ
ヒヤド ヒヤダルコ ヒヤダイン
バギ バギマ
フバーハ
ラナリオ
トラマナ レミール

本日の目玉商品『砂塵のヤリ』（後書き）

クロコダインを退けてレベルアップ！

しかし臆病者です。

もしもクロコダインが退かずに襲いかかってくれば間違いないオリ主は死んでいたでしょう！

流石運の良さ256とダイの主人公補正。

本日の目玉商品『鉄の剣』（前書き）

予約投稿は便利ですね。

赤い弓兵さんのファンのかたスイマセン。

先に謝っておきます。

気分を害される方もいるかも知れませんが…。

やっちまった感が拭えない今回。

本日の目玉商品『鉄の剣』

辛くもクロコダインを退けたダイ達。

一行は一旦ネイルの村に帰還し旅の疲れを癒す事になった。

「ピー〜〜！ピー〜〜！」

「ゴメちゃん！」

ダイ達はゴメちゃんがついてきた事に驚き、また再開を喜んだ。

「それにしてもゴメちゃんは凶暴化しないんだな」

「そうなんだよ。こいつにはなにか不思議な力があるのかもな」

「とにかく会えて良かった。ありがとう！マアム、タケル」

「どういたしまして……あ、お母さん」

人垣から出てきた優しそうな妙齡の女性。

マアムは嬉しそうに女性に駆け寄った。

「紹介するわ。母のレイラよ」

マアムは親娘並んで紹介。

並んでいるところをこうして見ると良く似ている。

「ねえ お母さん、この子達もアバン先生の弟子なんだって」

「まあ！アバン様の！？」

レイラは嘗て夫ロカとアバンと闘った仲間らしい。
戦士ロカと僧侶レイラ。

間違いなく英雄だ。

僧侶と戦士の力を受け継ぐマームは『僧侶戦士』という事だ。

「ところでアバン様はお元気ですか？」

レイラの言葉にダイは気まずそうにポップと顔を見合わせた。
ポップは言いづらそうに俯く。

「……え、えっと」

「げ、元気ですよ！」

ダイはポップの言葉を遮りながら無理やり笑顔を作った。

「そりゃもう、ピンピンしてますよ！」

「そうですか。良かった」

レイラは嬉しそうにニツコリと微笑んだ。

「ふむ、素晴らしい品揃えじゃのう」

「はい オレ自ら作り、仕入れた品々ですよ」

オレは現在、村長の家に来ていた。
村長と商談を行なっている。

魔王軍の復活に伴い商人が来なくなった村に蓄えの余裕は殆ど無い。
村に戻ってきた後、村長は直ぐにこれからの村の事を相談してきたのだ。

商人であるオレに食料や薬草などを売って欲しいのだとか。

「大した金額は払えぬが、何とかならぬものかのう……」

「こつちとしても商売ですからね。」

まあ、多少は勉強させてきたいただきますが」

「おお、それは有難い！

……それから、すまんが村を守るためにも……」

「武具が欲しいのですか？」

オレの前に並べられているのは薬草や毒消し草に食料だ。

袋から次々と取り出したオレに村長はそれはもう驚いていた。

やはりゲーム仕様の四次元袋は見た事がないようだ。

付け加えると、この袋はオレしか使えない。

ゲーム同様に盗まれる事は無いのだ。

オレ以外の人間は袋に物を入れることも取り出すことも出来無い。

「うむ、武具が高価な事は承知しておるが……

マアム……、あの娘だけに負担を掛け続けるのは……」

この村は本当に良い村のようだ。

村長を始めとした全ての村人がマアムの身を案じている。

まさに『一人は皆のために皆は一人のために』だ。

オレはドケチだが人情がない訳ではない。

それに今は平和な時代とは異なり非常時だ。

オレは鉄の剣や槍、盾を次々と取り出していく。

鎧や兜は……まあ要らないだろう。動けなくなるだろうし。

鍛えていない村人が完全武装は無理がある。

本日の商品はコレだ！

鉄の剣（1000G）

鉄の槍（1350G）

鉄の盾（900G）

「村人の男性の人数分、用意できますが如何いたしますか？」

「ううむ……、村にそんな金はないわい」

村の人口はそれほど多くはない。

若者の多くは城を守るために徴兵されているからだ。

武器を扱える男性は大体十人くらい。

それでも人数分の装備を揃えれば大金になる。

「そうですか、ならレンタルはどうでしょう？」

オレは予てより温めていた計画を初めて見ることにした。

「レンタルじゃと？」

「はい、これらの装備を格安でお貸しします。

期限は1年間、値段は本来の十分の一でどうでしょう？」

「うむ…、これならば何とかかなりそうじゃな
しかし良いのか？食料や薬草に加えて武器まで…
ワシが言うのも何じゃが、お主にも生活はあるじゃろっ？」

「心配は要りませんよ。」

村長はオレよりも村の事を考えてあげて下さい」

「……すまぬ」

村長は申し訳なさそうに俯いてしまった。

いや、マアムの生まれ故郷だし、この先の事を考えるとね…。
それにマアムは間違いなくダイ達に付いて旅に出してしまうのだ。
マアムの価値と天秤にかければ全然足りなくらいだ。

こうして武器を与えておけばマアムの心も少しは楽になる筈。
結果、オレの保身に繋がる！

「長老様、タケル！」

「ダイ？」

やって来たのはダイだった。

何やら真剣な面持ちでオレたちを見ている。
そして意を決したように口を開いた。

「どうか俺に、魔法を教えて下さいっ！！」

「何じゃと！？」

「はい！俺がこの村にいる間だけでいいんです」

「ダイ…」

「俺だけが呪文が苦手だなんて言ってられない！」

「しかしじゃな…」

確かにこの村ではワシが一番の魔法の使い手じゃ
だがアバンの使徒である君に教える程の力は無いぞ」

「右に同じく」

俺も人に教えるほどじゃない。

俺の魔法の使い方は中二全開の妄想力と魔法力に頼った力ずくだ。
多分、参考にはならないだろう。

某・赤い弓兵よろしく「想像するのは常に最強の…」みたいなノリ
でやってるのだ。

やばい、考えれば恥ずかしくなってきた。

絶対に人には教えられないな。

「俺、先生には3日しか修行を受けてないんだ」

ダイは目を伏せて消え入りそうな声で言った。

「なんじゃと！？どういうことじゃ！？」

ダイは悲しそうな表情を上げて告白した。

「長老、それにタケル…」

マームやおばさんには絶対に言わないで下さい…！
先生は…

アバン先生は死んだんですっ！！！！」

ダイは涙を流しながら言った。
握りこんだ拳と肩が震えている。
見てもらえないな。

俺はダイから目を逸らした。

「…あ」

森の向こうに誰かが走り去っていく。

あの後ろ姿はマアムだった。

オレたちの話を聞いていたのだろう。

これで原作通りマアムはダイ達と旅立つ。

喜ぶべきなんだろう。

だけ…。

「やりきれないよな…」

アバンは実は死んでいない。

教えるのは簡単だ。

けど、何故オレがそんな事を知っているのか矛盾が生まれる。

それだけではない。

アバンが心を鬼にして身を隠した意味が無くなってしまふ。

オレ自身も力を貸すなら、ダイ達の成長を阻害しない程度にしなければ。

これはさじ加減が難しい。

「タケル？」

「…あ、ああ。ごめん、ダイ
魔法の修行か……。」

オレも感覚的に使っているだけだし…」

「その感覚を教えて欲しいんだ」

「俺からも頼むよ」

「ポップ！」

何時のまにか現れたポップもオレに頭を下げた。

「俺に出来るのは手本として実際にやってみせる事だけだ
それでも良いなら構わないけど…」

「充分だよ！ありがとう！」

「ならばワシも微力ながら手助けさせてもらうかの」

こうしてダイの魔法の修行が始まった。

ダイは殆どの呪文の契約を既に済ませた後らしく契約の必要な無い。
どうやら故郷で育ててくれた『じいちゃん』が自分を魔法使いにする
為に片っ端から契約をさせたらしい。

魔法を扱う素養と準備自体は問題ないのである。

「じゃあ取り敢えず火炎系呪文からだな」^{メラ}

取り敢えず最も魔法力を消費せずに簡単なものから挑戦。^{マジックパワー}

俺の知る限り呪文とは先天的な資質があれば誰にでも使うことの出来るものだ。

契約によって魔法の力を宿し習得する。

そして魔法力、力量ともに足りていれば魔法は発動する。

そんな具合だ。

オレに促されて火炎呪文を唱えるダイ。
しかし呪文は巧く発動しない。

掌にマツチで付けたような小さな火が出るだけだ。
何度も唱えるが結果は同じ。

ダイは子犬のような目をオレに向けた。

「じゃあオレがやってみせる。ダイ、良く見てくれ」

「うん！」

オレの先には藁や木の枝で出来た人形が立てられている。
オレは指先に魔法力を集めプラス方向にイメージする。
こういう時に原作知識が役に立つ。

想像するのは常に最強の自分……なんちゃって。

「すげー」

オレの指先に瞬く間に火球が生み出された。

その大きさは大体バスケットボールくらいだ。
赤い炎はオレの想像力によって黄色に変わる。

あ、ちよつと間違えた。

「火炎呪文！」

撃ち出された火球は轟々と音を立てながら人形に命中。
一瞬で人形を灰に変えた。

「な、なな……」

振り変えると全員あんぐりと口を開いて固まっている。
やり過ぎたか？

確かに先刻のメラはメラミ並の威力があったからな。
現代で生きたオレは炎の色によって温度が変わってくる事を知っている。

魔法とは集中力とは良く言ったものだ。
錬金術師たるオレに相応しい使い方だ。

「あ……あれのどこが火炎呪文だ！どうみてもメラミ^{メラ}だろ！」

「凄いや！どうやったらそんな風に魔法が使えるの」

ダイは尊敬の眼差しをコチラに向けてくる。
やめて！そんなに純粋な目を向けないで！
オレのライフはとっくにゼロよ！

「ま、まあ……」

それはオレの中二の妄そ……

……いや、想像力というかなんというか……」

「チューニ？想像？どういう事？」

「そんな言葉、聞いた事ねーぞ」

ヤバっ！

声に出てた！？

えっと、どう言おうか……。

まさか中二病の説明をする訳にもいかなしな。
そして苦し紛れに出た言葉は。

「……そ」

「そ？」

「想像するのは常に最強の自分」

ゴメンナサイ赤い弓兵さん。

オレはあなたの言葉を汚してしまいました。

「なんか良いね。それ…」

そうか、常に最強の自分かあ…

そっういえば先生も言ってたっけ？

魔法はインスピレーションだって」

ポップも思うところがあるように頷いている。

ダイは気を取り直して標的である人形に手をかざした。

「^{メラ}火球呪文！」

見事に火球が出現する。

しかし飛んでいく気配がない。

「くっ、こうなったら…でりゃあああああ！……！」

ダイは火球を殴り飛ばした。

火球はオレの手本と同じように人形を灰に変えた。

ダイが無理やり打ち出したからだろう。

その威力はもはやメラではない。

マジで怖い。

ダイは嬉しそうにコチラを見ると、飛び上がって喜んだ。

「や、やったー！」

初めて自分の意志で魔法を成功させたぞー！」

「うむ、見事じゃ」

「けど、なんつう力技だよ…」

あんなの成功した内に入らねーよ」

「まあ良いじゃないか。

あんなに喜んでるんだ。水を差すのもな…」

「確かにな…」

ダイは未だに飛び跳ねて喜んでいる。

オレも初めて呪文を使った時はあんな風に喜んだな。

それはもう厨二全開だった…。

この際だ、次いでに真空系呪文も教えてみるか。

オレは飛び跳ねているダイの所へ歩き出した。

さいだいHP：89
さいだいMP：546

ちから：42

すばやさ：100

たいりよく：45

かしこさ：275

うんのよさ：256

攻撃力：115

防御力：107

どうぐ

E：ガンブレード

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパリング

E：星降る腕輪

E：魔法の弾×10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り 大防御

ホイミ ベホイミ

キアリー キアリク シャナク

メラ メラミ メラゾーマ
ギラ ベギラマ
イオ イオラ
ヒヤド ヒヤダルコ ヒヤダイン
バギ バギマ
フバーハ
ラナリオン
トラマナ レミーラ

本日の目玉商品『鉄の剣』（後書き）

中二病が発症したタケルでした。

ダイの大冒険で中二病が誤解されてる…。

チューニ＝魔法を使う為の優れた集中法？

ダイ君、ポップ騙されるな。

本日の目玉商品『鉄の胸当て』（前書き）

ランキング見て驚きました。

日間、週間、月間トップ！

読んでくれた沢山の読者様に感謝です！

ありがとうございます。

本日の目玉商品『鉄の胸当て』

「明日、村を出る？」

「そりゃまた急な事だな」

日も暮れ魔法の修行が終わり、俺達は明日に備えて休む事にした。
ミーナの家を宿として使わせてもらう。
食事も終わり床に付いたところでダイが村を出ると言い出した。

「うん、あまり長いできないから」

「ロモスに行くんだよな？」

何をしにいくのか聞いても良いか？」

「王様を助けに行くんだ！怪物に苦しめられてるらしいから」
モンスター

「……そう」

急な事にマームは目を丸くしている。
そして寂しそうな顔を見ると目を伏せて部屋を出ていった。

「さてと」

「あれ？どこ行くの？」

「ちょっと夜風に当たりにな」

オレは外に出ると先程までダイが特訓をしていた場所に來た。

寝る前にオレ自身の魔法の特訓をしようと思ったからだ。

これからの戦い、介入する気はないが巻き込まれる可能性が有る。

その時、自分の身を守る力は絶対に必要だ。

しかし強力な攻撃魔法を習得してしまえば、ポップの役目を奪いかねない。

なら小手先の技術を高めれば…。

オレは両掌にそれぞれ異なる呪文の構成を試みてみた。
しかし…。

「……ちっ！失敗か…

やっぱりそう簡単な技術じゃないんだな」

思うように集中できずに魔力は霧散してしまう。

二つ同時の呪文行使、どうやらかなりの高等技術の様だ。

「だからといって諦める気はないけど…」

オレは気を取り直して両掌に魔法力を集中させた。

もしも成功すれば戦術の幅が広がる。

そしてあの魔法も出来るかもしれない。

マジで夢が広がる！

「…おっと、雑念は捨てないとな」

オレは気を取り直して両手に魔力を集中した。

「……無理」

約1時間後。

オレは両手の魔力を霧散させて呟いた。
はつきり言って難しすぎる。

なんだよこれ！

ポップとマトリフの師弟コンビ、マジでチートだよ。
左右で異なる絵を描くよりも難しいわ！

こんなの一朝一夕では無理だ。

最終決戦でぶっつけ本番で成功させたポップに尊敬。

「今日は無理だな。

要練習だなこりゃ…

気を取り直して錬金でもするか」

オレはステ画面を開くと錬金釜を選択した。

目の前に錬金釜が出現する。

このゲーム仕様のお陰でオレは道具を盗まれた事が無い。
全くチートなスキルだよ。

オレは持っている全ての薬草と毒消し草を素材として使い、一段階
上の回復アイテムを作り出していく。

やっぱり何でもコツコツやるのが一番だ。

そして作業が終わり、心地よい眠気を感じる。

オレは明日に備えて床に就いた。

「もう朝か…」

窓の外を見た。

東の山からは日が顔を覗かせていた。

視線を下げると村の入口が見え、そこには人集りが出来ていた。

ダイとポップの見送りか。

俺も一緒に行こうかな。

魔の森を一人で抜けるよりもダイ達と一緒にのほうが安全だ。

「…いや」

俺は直ぐに考えなおした。

明日の朝にはクロコダインが百獣魔団を率いてロモスを襲う筈だ。

そうなれば魔の森の怪物もかなり少なくなるだろう。

村を出るならその時の方が良いかもしれない。

でも…。

「流石にナイフと布の服は…」

明後日にはダイはクロコダインと戦わなければならない。

しかも防具は無しナイフ一本…。

どんな罰ゲームだよ！

難易度HurdどころかVery Hardだよ！

「少しくらいなら、手助けしても良いよな…」

オレは直ぐに起きると、ダイ達の所に急いだ。

「ダイ兄ちゃん…」

怪物をやっけたら、絶対にまた来てね！」

「頑張るんじゃないぞ」

「気をつけてな」

「マアムもありがとう!」

「ごめんね、本当はついて行ってあげたいけど」

「大丈夫さ!ちゃんと地図をもらったしね!」

「ダイ、ポップ!」

「タケルも見送りに来てくれたの?」

ダイ達に駆け寄ると、ダイは嬉しそうにオレの顔を見上げた。
だからそんな顔で見ないで欲しい。

伝説級の武具を上げてくなる。

オレは尤もらしく咳を一つ、道具袋からあるものを取り出した。

「それもあるが、ダイに受け取ってほしい物がある」

「え、何を…」

オレは道具袋から鉄の剣と鉄の胸当てを取り出した。

「え、えええっ!?!」

剣と胸当てを見て、ダイは目を白黒させて驚いた。

「ダイ、装備してやるからコツチに來い」

よろず屋がサービスでお客さんに装備させてあげるのはデフォだ。
オレのコーディネートに驚くが良い！

「も、貰えないよ！オレ、お金なんて無いし！

そう言いながらもダイはチラチラと鉄の剣を見ている。
本当は欲しいくせに無理しやがって。
オレはダイの肩に手をおいた。

「ダイ、良く聞いてくれ」

「う、うん…」

「きのう現れたあの怪物…
恐らく近い内にダイのところに現れるはずだ」

オレの言葉にダイは真剣な表情で頷く。

「敵は独りじゃない。
百獣魔団とかいうのも居る…

いくらお前が強くてもナイフ一本で勝てる程、連中は甘くない」

「そ、それは…」

オレは更に畳み掛ける。

「昨日の戦い…」

「え？」

「正直言つて凄かった…」

オレ、メチャ怖くて死ぬかと思つたんだ…
でもさ…

ダイが戦つてるところを見て、こつ何ていうのかな…」

ダイ達は黙つてオレの話を聞いている。

「子供だけど、とてもそうは見えないつていうか
うん、本当にダイが勇者に見えたんだよ…」

「オレが勇者？」

ダイは目を丸くして驚く。

オレはダイの言葉に「ああ」と答えて剣を差し出した。

「オレは商人だ…」

魔法はそれなりに使える。

けど実際に戦いの術を学んだわけじゃない…

オレにはダイの様に魔王軍と戦う事は出来無い。
だから…。

オレはお前に賭けてみようと思う」

「タケル…」

「俺の代わりにその装備を連れていつてくれないか？

さつきも言つたけど、クロコダイン相手にナイフ一本は無理だ」

唯でさえクロコダインの方が力量が上なんだ。
レベル

しかも真空の斧とゴツイ鎧まで装備している。

その上ザボエラまで絡んで来るのだ。

Very Hardとか思っただけど、難易度はそれ以上かもしれない。

オレは真剣な表情でダイの顔を見つめた。

ダイは理解し力強く頷いた。

「ありがとう、タケル！」

オレ、絶対に口モスの王様を助けるよ！」

「頼んだぞ」

オレは早速ダイに鉄の胸当てと鉄の剣を装備させてやった。

布の服の上で光る銀色の防具。

腰に差された鉄の剣。

こうして見ると一端の戦士に見える。

かなり見違えた。

「ど、どうかな？」

ダイは照れくさそうに言った。

「よく似合ってるぞ」

どうせクロコダインを倒せば鋼の剣を貰えるんだ。

鉄の剣くらいなら問題ないだろう。

切れ味ならパプニカのナイフの方が上かもしれないし。

「な、なあ！オレには？」

「臆病が治ればくれてやるよ」

「なんだよ！それ！」

「あはは！」

すまんポップ！

本気でゴメン！

クロコダイン戦が終われば良い装備を上げるから許してくれい！

「代わりにコレをやるよ」

「なんだよ、コレは？」

「俺特性、特やくそうだ！」

「特やくそう…」

ああーっ！思い出した！

以前、ベンガーナにいた強欲商人！」

「失礼な。

適正価格って言っただろ？

あれ？言っただけ？」

「聞いてねーよ！

まあ、先生も褒めてたから効果は良いみたいだけど
ていうか金は取らないのかよ！？」

「今は非常時だ。

皆の為に戦ってくれてる勇者から金は取れないよ。

俺が金を取る相手は持っている相手だけだ！」

決まった！

本当はそうでも無いんだけどな…。

周りを見ると皆が感心したように俺を見ている。
照れるじゃないか…。

「……んんっ！

じゃあな！ダイ、ポップ！

二人とも絶対に死ぬんじゃないぞ！」

「うん！じゃあもう行くよ！」

「元気でな！」

ダイとポップは別れを惜しみながら手を振り、森の中に消えていった。

「本当に大した奴らだな…」

「全くじゃ…

あんなに小さいのに魔王軍と戦おうとは…」

「マアム？」

ふとマアムを見ると、彼女は泣いていた。

既に見えなくなった二人の後ろ姿。

彼らが消えた森を見ながら涙を流していた。
母レイラがマアムの肩にそっと手を置いた。

「行ってあげなさい」

「お母さん……」

「私達のことは構わずに」

レイラはマームに武器を渡しながら微笑む。

「私もね…むかし

傷つきながらも戦い続けたアバン様とお父さん…
二人を見かねて村を飛び出したのよ」

「お母さん!」

「私の娘だもの、しょうがないわよ」

「そうだよ!」

「いつてきなよ!」

村の人たちも口々に声を上げた。

「村のことなら心配ないぞ

タケル殿が格安で武具を貸してくれたのでな」

「タケルが?」

「まあ…

それよりもマーム…

ダイ達にはお前が必要だ…」

俺はダイと同じ鉄の胸当てをマアムに手渡した。

「ダイ達を頼む…」

マアムは力強く頷くと魔の森に向かって走りだした。

「マアムにまで…ありがとうタケルさん」

マアムが入った後、レイラさんに感謝された。
こうしてみるとマジで美人だな。

「いえ、良いんですよ。」

俺にはコレくらいしか出来ませんから…」

ふう、これでダイ達と別行動が出来るな。

心配だけど自分の命と天秤に掛ければ自分の命に傾く。

肩の荷が降りた。

昨日、ダイ達がいたとはいえ、クロコダイン戦で懲りた。

アレは怖すぎる。

もしクロコダインが退いてくれなかったらと思うとゾツとする。

暫くほのぼのが続けば良いな

本日のタケルのステータス

レベル15

さいだいHP：89

さいだいMP：546

ちから：42

すばやさ：100

たいりよく：45

かしこさ：275

うんのよさ：256

攻撃力：115

防御力：107

どうぐ

E：ガンブレード

E：ビロードマント

E：力の盾・改

E：幸せの帽子

E：スーパリング

E：星降る腕輪

E：魔法の弾×10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛

寝る 忍び足 穴掘り 大防御

ホイミ ベホイミ
キアリー キアリク シャナク
メラ メラミ メラゾーマ
ギラ ベギラマ
イオ イオラ
ヒヤド ヒヤダルコ ヒヤダイ
ン
バギ バギマ
フバーハ
ラナリオン
トラマナ レミーラ

本日の目玉商品『鉄の胸当て』（後書き）

タケルは布の服。防具ではないと思っています。
唯の普段着です。
今回は少し短めです。

本日の目玉商品『身かわしの服』（前書き）

原作に絡ませると少し長くなりますね。
しかし好きなシーンなので入れてみました。

本日の目玉商品『身かわしの服』

ダイ達がロモスに向けて出発した後。

オレは一人、頭を悩ませていた。

次の目的地はベンガーナ。

恐らく現時点では最も安全な国だ。

ベンガーナの誇る戦車は実際に、何度も魔王軍の侵攻を防いでいる。初めて戦車を見た時は感動したものだ。

「はあ…」

オレは大きく溜息を付いた。

やっぱりダイ達が気になる。

心配してるわけじゃない。

何せダイは主人公。

それに竜の紋章まであるのだ。

どんなにピンチに陥っても勝てる要素はあるのだ。

「心配？」

ふと横から声がかかった。

レイラさんだ。

何時の間にかオレの隣にいた。

「ダイ君達の身を案じているのでしょうか？」

そりゃ勘違いだ…。

最近良く勘違いされてるなオレ…。

ここは一つ誤解を解いておかないとな。

「いえ、ダイ達なら大丈夫だと思います。
それに心配してるわけじゃないですよ。
それよりもこれから先の事です」

「これから先の事？」

「はい、次はベンガーナにでも行こうと思って…
あの国には戦車もあります。
魔王軍もそう簡単には攻められないでしょう？」

オレの言葉にレイラさんは目を見開く。
そしてクスクスと笑った。

「えっと…オレ、可笑しいこと言いましたか？」

「ええ、何だかんだ言っても
あなたはダイ君達の身を案じている
だってそうでしょ？
そうやって理由をつけて
あなたはロモスに行こうとしてるんですもの」

何を言ってるんですか奥さん…。
自分勝手に自己解釈しないで下さい。

「だってベンガーナに行くにしても
ロモスから船に乗る必要があるでしょ？
お見通しよ…」

レイラさんの言葉にオレは固まった。

そうだった…。

ルーラの出来無いオレには徒歩か船しか移動手段はない。キメラの翼は最後に立ち寄った町や村に限定されている。レイラさんはニコニコとした顔で俺を見ている。

やばい、物凄くやばい展開。

もしかして期待してますか？

しがない商人の俺に期待してますか奥さん？

それに皆さんもそんなに期待に満ちた目で見ないでくれ。

「商人の兄ちゃん、マアム姉ちゃんを助けてくれるの？」

「頑張つて！」

「まだ若いのに大したもんじゃ」

何この展開。

もしかしてオレ、ロモス行き確定！？

レイラさんを見る。相変わらずニコニコ。

村の皆を見る。期待に満ちた眼差し。

断れる雰囲気じゃない。

「……い、いや」

レイラさん流石！バレてました？

…適わないな」

冷や汗ダラダラなオレ。

何でこんな事になったんだろう。

確かにベンガーナに行くにはロモスから船に乗らなきゃいけない。行くしかないのか？

でもって戦いに巻き込まれるのか？

いや諦めるの早い。

今からゆつくり行けばもしかしたらクロコダイン戦が終わった後に着くかもしれない。そうなればオレはこのままベンガーナに行けば良い。

そうと決まれば…。

「じゃあそろそろ行きます。

皆さん、お元気で」

「気をつけるのじゃぞ」

「マアムの事、よろしくお願いします」

こうしてオレはロモスへと旅立った。

「ゆつくり行こう…」

なるべくゆつくりと…

一晩くらい野宿しても良いかも…」

ロモスの城下町。

魔の森を抜けたオレは門を抜けて街に入った。

「きゃああああ」

「た、助けてくれーっ!」

周りからは悲鳴と獣の吠え声が響いてくる。

それだけじゃない。

ゴオオオオオオッ！！！！

街からは火の手が上がり、ガラガラと建物が崩れる音も聞こえてきた。

火炎系呪文か閃熱呪文か、魔物が使ったのだろう。

「なんでこうなる」

オレは城門の影に身を隠して街の様子を伺っている。

実はもつと遅くに…。

少なくとも事が終わった後ロモスに到着する予定だった。

けど無理だった。

魔の森で野宿が。

そんな度胸、ヘタレたオレには無理だったのですよ！

凶暴な怪物が徘徊してるような森で一人眠るなんて出来るか！

誰だよ！魔物の数が減ってるなんて言ったのは！

お陰で無理やりの強行軍。

超スピードでロモスを目指して疾走した。

星降る腕輪の力もあって日が登る頃にはロモスに到着した。

「嗚呼、逃げようが立ち向かおうが危険じゃん」

兎に角、ロモス城にだけは行かない方が良いな。

天秤に掛ければ逃げた方がまだ安全だしな。

にしてもモンスター怖い…。

このまま立ち止まっているのは流石に不味い。

オレは聖水を自分にふりかけると、教会へと走りだした。

タケルがロモスに到着する少し前

ダイ達は怪物達の大きな咆哮で目を覚ました。

窓を開けると既に怪物は城下町に侵入しており、町は阿鼻叫喚だった。

既に人々に犠牲も出ている。

「そ、総攻撃をかけてきやがった…」

ポップは身を竦ませている。

「お、おい！ありや一体なんなんだ！」

隣の部屋にいた偽勇者が泡くって飛び込んできた。

「百獣魔団が来たんだ！」

「そ、そんな！」

今までこんな大軍で魔物が襲ってきた事なんて！」

『グオオオオオッ！！！！』

今度は空から猛獣の雄叫びが響く。

クロコダインだ。

ヘルコンドルの力を借りて空を飛んでいる。

そしてそれに付き従うように鳥系の魔物が後に続いている。

「行け！行けいっ！！」

ロモス城を殲滅するのだあつ!!!」

怒りに燃えるその形相に面々は冷や汗をかいた。
偽勇者の一行は、全身を震えさせて怯えている。

「城へ向かつてる?」

マアムの呟きにダイはキツと唇を噛んだ。

ダイは装備を身につけると部屋を飛び出していった。

「早く後を追わないと!」

マアムは急いで身支度を整える。

そして壁に立て掛けておいたハンマースピアを取った。

「さあ行くわよ!」

「え、ええ!? 何でだよ!」

ポップはマアムの言葉に難色を示した。

「先刻のクロコダインの目を見なかったの!」

あいつはダイを殺す事しか頭に無いわ!
今すぐ助けに行かなきゃ!」

「俺たちやゴメンだからな!」

「そうよ! なんとたつて命が一番大事だしね」

「ハハ、俺も賛成」

偽勇者達の意見にポップは賛成を表明。
その言葉にマームは怒った。

ポップの胸ぐらを掴んで引き寄せて叫ぶ。

「何ふざけてんのよ！？早く…っ！」

「けどよ、ヤツは半端じゃなく強いんだぜ？
行っても殺されるだけだっ…」

「だから私達が助けに行くんでしょ！？
早くしないとダイが殺されちゃう…！
3人で力を合わせなきゃ…！」

「心配ねえって…
いざとなりやダイはめっぼう強いし…
死にやしねえよ」

「…ポップ？」

マームは信じられないといった顔でポップを見る。
ポップはバツが悪そうに目を逸らすだけ。
二人の間に重い空気が流れる。
号を煮やしたマームはポップを揺すって叫ぶ。

「あなた、ダイの友達じゃないの！？
仲間じゃなかったのっ！？
どうしたのよ！」

「うつせえな！」

オレは初めから魔王軍と戦う気は無かったんだ！
好きで戦っていた訳じゃないんだよ！」

ポップは肩を震わせて叫んだ・

「そりゃアイツとは一緒に修行した仲だ
けどよ…」

あ、あいつがいるから次々と敵が襲ってくるんだぜ？
巻き添えくって死にたかねえっ！」

「…っ！」

次の瞬間、ポップは吹き飛んでいた。
マームが力の限りポップをぶん殴ったのだ。
ポップは壁を突き破って倒れた。
すぐに身を起こしてマームを睨みつける。

「…て、てめえっ！」

しかし言葉が続かなかった。
マームが泣いていたのだ。

その表情は失望と落胆、そして深い悲しみ。

「あなた、アバン先生から何を学んだの？
ダイのあなたも先生の敵を討つために…
命がけで戦っている…」

そう思ったからこそ私、ついてきたのに…
仲間になったのに…」

「マーム…」

「最低よ！」

あんたの顔なんて二度と見たくない！」

マームは背を向けて走りだした。

なんとか怪物をやり過ごしながらオレは教会へと目指していた。

逃げ切れない怪物を攻撃呪文で倒しオレは走る。

十字架の付いた三角の屋根が見える。

教会に間違いない。

非常時なら教会に住人が避難しているはず。

薬草を持っていけばウハウハだ！

命が掛かっているんだ。かなり売れるに違いない！

「……ん？」

あれは、マームか？」

目に涙をためたマームが走っていくのが見える。

向かう先には城がある。

どうやらポップと別れてダイを助けに行くみたいだ。

「……気になる」

ポップが勇気を振り絞って立ち上がるシーン。

メチャクチャ気になる……。

でも前も好奇心に負けて死にそうな目に合ったんだよな。
しかし今回は迷わず様子を見に行く！

何せダイの大冒険で一番好きなキャラを聞かれれば迷いなくポップと答えてしまうオレ！

それにクロコダインの所に行く訳じゃないし…。
ちよつとだけなら…。

気がつけばオレはマアムが来た方角に向かっていた。

少し行くと『I I N』の看板が見える。

あそこにポップが居る筈だ。

マアムがダイの後を追って少し。

ポップは葛藤の渦にいた。

怪物が怖い。自分なんかが適うわけがない。

痛いのも怖いのも嫌だ。

死にたくない。

でも…。

本当はダイ達を助けに行きたい…。

「…いや、関係ない！関係ねえさ！

あいつらが死のうとオレの知ったこつちゃねえっ！」

そうだよ。

それにオレなんかが行っても意味はない。

クロコダインに殺されるだけだ。

最終的にはそう完結してしまう。

ポップはそんな自分が堪らなく嫌だった。

「おじやまするよ」

「だれだ？」

現れたのは魔法使いの老人だった。

「たしか、偽勇者の……」

「ホッホッホ」

魔法使いの男は怪しそうな笑みを浮かべると、部屋に備え付けられている椅子に腰を下ろした。

「あんたは逃げねえのか？」

「あいにくと皆が逃げてからがワシの仕事での」

魔法使いはローブに隠してある金品をテーブルに置いた。

「廃品回収と言うわけじゃな……」

「何を言っただがんだ！」

そついうのを火事場ドロボーって言うんだ！」

「どうじゃ？」

お前さん、ワシの仲間にならんか？

見たところ見所がありそうじゃ……」

「冗談じゃねえ！

いいか？

オレはかつて魔王を倒した勇者アバンの弟子だ！

てめえら小悪党と一緒にするな！」

ポップはアバンの印を取り出して叫んだ。

「ほほう…」

ワシには全く変わらんように見えるぞ？」

「何だと！？」

「仲間を見捨てるような者に務まるかの？
あの有名なアバンの使徒というのは…？」

ポップは痛いところを突かれ口竅った。
全くもってその通りだからだ。
ポップ自身、既に自覚している。
だが踏み出す勇気がないのだ。

「どれ…」

お前の仲間がどうなっているのか
ワシが水晶玉で見るとするか…」

魔法使いは取り出した水晶玉に魔力を込めた。
水晶玉が光を放ち、望みの風景を映し出す。

「ああっ…！？」

映しだされたのは倒れたダイを見下ろすクロコダインだった。
鬼面道士プラスも居る。

ダイに取っては手を出せない育ての親だ。
デルムリン島の結界の外に出た為ダイの敵に回ってしまったのだろ
う。

マアムは悪魔の目玉に捉えられて身動きが取れない状態だ。
まさに絶体絶命だ。

ポップは水晶玉に縋り付いて涙を流した。
何とかしてやりたい！助けたい！

「ちくしょう…っ！」

「勇者とは勇氣ある者っ！！！」

いきなりの言葉にポップは顔を上げた。

いつもは悪人顔の魔法使いの真剣な表情。
思わずポップは聞き入ってしまう。

男は立ち上がって叫んだ。

「真の勇氣とは打算なきもの！
相手の強さによって出したり引つ込めたりするのは
本当の勇氣ではないっ！！」

男の言葉にポップは肩を震わせた。

それは自分自身だったからに他ならない。
打算に満ちた自身の行動…。

男はフツと笑うと再び腰を下ろした。

「なんてな…」

ワシの台詞じゃないぞ

ワシの師匠がいつも言っていた言葉じゃ」

「…師匠？」

「ワシもな…」

若い頃は正義の魔法使いになりたくて
修行しとったんじゃないよ…

けど駄目だった

自分よりも強い奴が相手だと

どうしても踏ん張れなくてのう…

仲間を見捨てて逃げるなんてザラじゃった
おかげで今はこのザマじゃ」

「じいさん」

「お前さんを見ると昔の自分と重なっての
放っておけん気になってしまってたな…
ちと、おせっかいをしたんじゃないよ」

男はポップの胸に手をおいて言った。

「さあ早く行け

胸に勇気の欠片が一粒でも残っているうちに…
小悪党にやなりたくないだろう？」

それはポップの望んでいた最後の一押しだった。

魔法使いの男はポップの背中を押したのだ。

ポップは目に強い決意を宿していた。

もう迷いはなかった。

ポップは部屋を飛び出した。

「ポップ！」

「お、おめえは、タケルじゃねえか!？」

宿屋から飛び出したポップに声を掛けたのはタケルだった。

オレが宿屋の前に来ると血相変えたポップが飛び出してきた。
そうか、これからクロコダインと戦いに行くのか。
凄い勇気だな。

さすが魂の力『勇氣』の人だけの事はある。
オレにはとても真似出来無い。
けど少しの手助けくらいは許されるだろう。
オレはポップに声を掛けた。

「ポップ！」

「お、おめえは、タケルじゃねえか!？」

「行くのか？クロコダインの所に」

「…ああ」

強い目だ。

今のポップになら武具を渡しても良い。

オレはポップに用意しておいた防具を手渡した。

「こ、こりゃ…『身かわしの服』じゃねえか!？」

「急いで着ろ！
時間がないんだろう？」

ポップが驚くのも無理は無い。

身かわしの服は高級品だ。

動きやすい様に作られており敵の攻撃を避けやすい。

しかも鉄の鎧よりも丈夫なのだ。

非力な魔法使いにとっては心強い防具なのだ。

「けどよ…」

「オレに出来るのはここまでだ

出来ればオレも一緒に行ってやりたいが…」

オレは教会の方を見る。

向こうからは人の悲痛な泣き声が聞こえてくる。

ポップの表情が歪む。

「オレはオレに出来る事をしようと思う」

これは本音だ。

オレは大量の回復アイテムを持っている。

今は役立てる時だ。

「ダイとマームを助けるんだろ？」

オレの言葉にポップは力強く頷いた。

ポップは着ている服を脱ぎ捨てると走りだした。

どうやら走りながら身かわしの服を着る気の様だ。

「やれやれ、たった一日で変わるもんだな

アレが本物ってやつなんだろうな」

上半身裸で身かわしの服を脇に抱えて走るポップ。
その後ろ姿を見ながらオレは溜息を付いた。

「頑張れよ…ポップ

オレ、お前の大ファンなんだからな…」

勿論ダイよりも…。

こんな事、とても本人には言えないよな。

オレはポップに言った言葉を実行する為に走りだした。

本日のタケルのステータス

レベル16

さいだいHP：95

さいだいMP：550

ちから：45

すばやさ：110
たいりよく：47
かしこさ：275
うんのよさ：256

攻撃力：118
防御力：112

どうぐ

E：ガンブレード
E：ビロードマント
E：力の盾・改
E：幸せの帽子
E：スーパリング
E：星降る腕輪
E：魔法の弾×10

呪文・特技

錬金釜 採取 大声 口笛
寝る 忍び足 穴掘り 大防御

ホイミ ベホイミ
キアリー キアリク シアナク
メラ メラミ メラゾーマ
ギラ ベギラマ
イオ イオラ
ヒヤド ヒヤダルコ ヒヤダイン
バギ バギマ

フバーハ
ラナリオン
トラマナ
レミーラ
インパス

本日の目玉商品『身かわしの服』（後書き）

タケルにBL趣向はありません。

純粹にポップのファンなだけです。

身かわしの服はやり過ぎでしょうか？

クロコダイン戦の後、確か旅人の服を貰えた筈…。

鉄の鎧よりも丈夫で回避率UPな装備…やり過ぎかな？

実は迷いました。

『身かわしの服』か『くじけぬ心』か…。

でも『くじけぬ心』はポップよりもタケルにこそ必要なものかなと…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2165z/>

ダイの大冒険でよろず屋を営んでいます

2011年12月16日21時28分発行